
調査を実施して

モノグラフ「中学生の世界」では、これまで主として、中学生の意識に焦点を据えて考察を行なってきた。

しかし中学生にとって、教師の存在は親と同じように、重要な意味を持つ。そこで、今回は趣向をかえ、先生方を対象とした調査を行なうことにした。調査票は巻末に付した通りだが、実施にあたって福武書店教育研究所の全面的な協力を仰いだ。生徒を対象とする調査と異なり、サンプル集めは困難をきわめた。先生方はテストをするのは好きだが、ご自身がテストされるのは大嫌いらしいというような皮肉のひとつももらしたい気持ちである。

だが、曲りなりにも調査を実施することができ、調査結果を公表できるようになり、アンケートにご協力をいただいた先生方の誠意に感謝の意を表したい。それと同時に、いつものことながら困難な調査の実施に援助、協力をいただいた福武書店社長・福武哲彦氏をはじめ、教育研究所・加藤智禧氏、調査室担当の佐藤雅子氏などの福武書店各位のご厚情に感謝の気持ちを述べておきたい。

なお今回は、教職のあり方を主たる考察対象としたため、この問題の背景を探る意味で、千葉大学助教授・明石要一氏に「研究ノート・教師研究の動向と課題」の執筆を仰いだ。したがって、執筆の分担は

本論	奈良教育大学教授	深谷昌志
研究ノート	千葉大学助教授	明石要一

の通りである。

昭和56年1月

奈良教育大学教授 深谷 昌志

本報告書の要約

- ① 教員のほぼ半数はサラリーマン家庭の出身者であった。(表2)
- ② 小学校時代、成績がよく先生から信頼されていた者がほぼ半数を占める。(表3)
- ③ 教師に積極的になった者は76.8%である。(表4)
- ④ 教師たちの在校時間は、ほぼ10時間である。(表6)
- ⑤ 帰宅後の自由時間は平均して4時間半。その内教材研究や清書に2時間20分が費されていた。
(表7)
- ⑥ 多くの教師たちは、専門的な知識を持って熱心に授業をしていると自己評価をしている。(表11)
- ⑦ しかし、クラブ活動を指導したり、生徒の悩みを積極的に聞く教師は少なかった。(表11)
- ⑧ 教師たちは、教師としてかっこうがつくまでに4～5年の才月が必要と考えている。(表17)
- ⑨ 多くの教師たちは、一人前の教師となるのに、10年近い年期が必要だと考えている。(表18)
- ⑩ 55%の教師は、教職の現状をセミ専門職と考え、81%の者は、将来教職が専門職化されるのが望ましいと答えていた。(表19)
- ⑪ だが、専門職化するための具体策については、共通の理解が形成されていない印象を受ける。
(表22)
- ⑫ 生徒の心の内を理解できないでいる教師が少なくない。(表26)

*

教師たちは、教職の現状をセミ専門職と考え、専門職化を強く望んでいた。しかし、そのための方向性を見出せないでいる。特に、多くの教師は、教材研究や授業への取り組みに自信を持っているが、生徒への理解に欠ける印象を受けた。このギャップをうめることが、教職が専門職化するために不可欠と考えられる。



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません

1. 調査目的

アメリカで見た 教師の姿

昨年アメリカを訪れた折、なん校かの学校を尋ねる機会があった。始めの内、オープンスクール風の校舎や柔軟なカリキュラム展開に目を奪われたが、それに慣れるにつれて、教師の姿に関心が集まってきた。

ジーンズをはいていたり、Tシャツだけだったりのラフな服装で、いかにもフランクでとっつきやすい。しかも、異国から来た研究者に授業を見学させた後に、自分の教育観を語り、気のついたことがあったら何でも話して欲しいという。感想を述べるとすぐに、その点はこう考えているというような回答が返ってくる。そして、同感できる点があるときさっそく明日からの授業に取り入れたいともいう。

服装以外に、教師としての態度もフランクだったが、そうした反面、その人なりのユニークで、しっかりとした教育観を抱いているのを目を見はった。しかも、ひとりだけでなく、次の教室を訪ねても、別のタイプの教師が姿をあらわす。われわれの知っているやや暗い感じの教師とはあまりに異質の明るさが、アメリカの教師にはあった。

それぞれに社会的な条件を異にするから、日米のどちらの教師の方が望ましいか、安易な結論は控えたいが、アメリカで接した教師たちのフランクさや明るさは、日本の教師に欠けるもののように思われた。

そうした感想はともあれ、現在の教師たちの中で、もっとも悩みの深いのは中学の教師であろう。片方に進学の問題をかかえ、他方に非行や校内暴力の問題もある。しかも義務教育の学校であるから、高校のように退学というような伝字の宝刀を抜きがたい。

中学教師たちのそうした意識の一端を明らかにしたいと考え、調査を実施することにした。しかし、アンケート用紙の制約から今回は専門職性に焦点をあてて分析を行なうこととし、その他の問題は、別の機会にゆずらざるをえなかった。

2. サンプルの構成

男子教師が 4分の3

教師を対象とした調査を行なう時に隘路となるのは、サンプル集団をいかに見出すかである。教育委員会経由の調査票配布は勤務評定まがいの誤解を与えかねないので、東京近郊の知り合いの校長経由で教師の協力を求め、調査票は郵送で回収することにした。

配布した調査票は2,000。回収できた有効サンプル数は306通、回収率は15.3%にすぎなかった。もっとも、本調査の場合、個々に督促状を出すのを控えたので、ある程度、回収率が低下するのは避けられないと考えたが、それにしても回収率の低さは予想を上回るものであった。

サンプル構成を表1に示した。この数値を中学教師全体と対比させると、本サンプルの場合、以下のような特徴が認められる。

- ① 全国平均で、女性教師は31.4%であるのに、本サンプルの女性比率は7%ほど少ない。
- ② 50代以上の教師の比率が、全国平均の13.2%と比べ、9%ほど高い。
- ③ 体育13.3%、音楽6.5%などの全国平均と比べ、技能教科担当者からの回収が少なかった。

〈表1〉 サンプルの構成

(%)

性別	男子 75.5	女子 24.5	
年 令	25才以下 7.8	26～29才 12.2	
	30代 21.7	40代 35.9	
	50代以上 22.4		
担当教科	国語 18.3	英語 14.6	数学 14.6
	理科 18.6	社会 14.9	保健体育 7.8
	技術家庭 5.1	美術 3.4	音楽 2.7
学 歴	師範学校 4.8	短大 7.1	
	教育学部系大学 39.7	教育学部以外の大学 39.0	
	その他 8.9		
家 族	未婚 20.4	既婚子どもなし 7.1	
	子ども1人 17.0	子ども2人 42.6	
	子ども3人 12.2	4人以上 0.7	

したがって、全体としてとらえると、本サンプルの反応は、年輩の男性教師の意識がやや強くあらわれる可能性が考えられるので、データの解釈にあたり、そうした配慮を忘れてはならないように思われる。

なお、調査票は昭和55年5～7月に配布し、9月初旬から集計を行なった。



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません

1. 出身階層

半数が
サラリーマン
家庭の出身

表2に、サンプルの出身階層を示した。★印の最頻値の欄から明らかのように、会社員の父を持ち、母親は専業主婦で、生活程度は「ふつう位」の者がほぼ半数に達する。教員の出身階層は、伝統的に経済的に恵まれないが、まじめな家庭に多いといわれてきた。第二次大戦までの複線型の学校制度のもとでは、学費を負担してくれるのが師範学校だけであつたから、意欲に富んでいるが、経済的に恵まれない若者が師範の門を叩いたのである。そのような家庭環境が、師範学校の閉鎖的なスクールカラーに重なった形で、いわゆる師範タイプを生む土壌となったといわれる。

そうした歴史的な推移を視野に置くと、教員の出身階層がホワイトカラー化している事実に今昔の感を拭いえない。

なお、表3が示すように、教師の大半は、小学校高学年の頃、「学業がかなりでき、先生からの信頼もかなりあつた」と答えている。表1の第3欄に示したように、現在の教師の8割は大学教育の修了者なので、小学校時代、上の下程度の成績をとるまじめな子どもで、中学、高校へと進み、大学進学にあたって、いわゆる一流大学とまではいかなくとも、まじめさを生かして教育学部系を進むか、その他の大学で教職課程をとるかして、現在を迎えたというのが、教師たちのキャリアであつた。

〈表2〉 生まれた家庭

★=最頻値 (%)

父の仕事	会社員	★43.2
	農漁業	14.8
	教員	12.4
	自営業	19.6
	その他	10.0
母の仕事	専業主婦	★56.2
	農漁業	16.9
	教員	7.6
	家業	9.3
	教員以外	3.1
経済状態	とても豊か	2.1
	やや豊か	19.0
	ふつう位	★51.0
	やや貧しい	22.4
	とても貧しい	5.5
肉親の教職経験者	父	22.2
	母	18.5
	兄弟	32.3
	おじ・おば	35.7
	いどこ	38.6

注1) ひとりでも短期間でもよい

〈表3〉 小学校高等学年の頃

(%)

学業	できた	<ul style="list-style-type: none"> とても 15.2 かなり★37.6 やや 28.3
	ふつう位	
苦手		<ul style="list-style-type: none"> やや 1.0 かなり 1.0 とても 0.3
	リーダーシップ	
リーダーシップ	あった	<ul style="list-style-type: none"> とても 7.9 かなり 24.8 やや 26.6
	ふつう位	★26.9
なかった		<ul style="list-style-type: none"> やや 8.3 かなり 3.8 とても 1.7
	友だちの数	
友だちの数	多かった	<ul style="list-style-type: none"> とても 7.2 かなり 31.6 やや 19.6
	ふつう位	★31.8
少なかった		<ul style="list-style-type: none"> やや 6.9 かなり 2.8 とても 0.1
	先生からの信頼	
先生からの信頼	あった	<ul style="list-style-type: none"> とても 14.5 かなり★35.2 やや 29.3
	ふつう位	15.5
なかった		<ul style="list-style-type: none"> やや 3.8 かなり 1.0 まったく 0.7

**大学へ入ってから
教職をつく気を
固めたのが47.5%**

なお、いつ頃から教職を志ざしたかの結果を表4に示した。小学生たちに「つきたい仕事」を尋ねると一定の比率で「先生」があがってくる。しかし、小学生の頃から教師につくつもりだったと答えた者は1割にすぎず、半数近い者は大学へ入ってから進路を定めたと答えている。したがって、こうした「大学へ入ってから」と「高校生の頃」を含めると、ほぼ7割の者が、かなり遅くなってから教職を志ざした計算になる。

つまり、高校から大学にかけて、いくつかある仕事のひとつとして、教職を選んでいる。したがっ

て「もし教師にならなかったら、どんな仕事についたと思うか」の設問に対しても、①会社員、公務員41.3% ②技師19.5% ③医師や研究者15.8% ④家業を継ぐ12.1%のように、ホワイトカラーと専門職とを混ぜた感じの回答が4分の3を占める。

こうした進路の傾向と、先ほどの出身階層とをあわせて考えると、教職が開かれた職種に変わっているのがわかる。それと同時に「やや」を含めると、「積極的に教師になった」者が76.8%に達している。一昔前に、デモ・シカ教師という言葉がはやったことがあった。「教師にでも」あるいは「教師にしか」なれないと感じながら、やむをえず教職につく態度を批判した言葉だが、そうした「デモ・シカ」の傾向は、すっかり影を潜めている。

なお、教職につく気持ちの年代別の変化を表5にまとめてみた。30代の教師の意欲がやや低く、20代になると男子を中心として「とても積極的に教師になった」者の比率が高まっている。

〈表4〉 教職につくきっかけ

(%)

つこうと思った時期	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">小学低学年から</td> <td style="width: 10%; text-align: right;">5.3</td> <td rowspan="2" style="width: 5%; vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="2" style="width: 5%; vertical-align: middle;">11.7</td> <td rowspan="4" style="width: 5%; vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="4" style="width: 5%; vertical-align: middle;">52.5</td> </tr> <tr> <td>小学高学年から</td> <td style="text-align: right;">6.4</td> </tr> <tr> <td>中学生の頃</td> <td style="text-align: right;">19.5</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: middle;">40.8</td> </tr> <tr> <td>高校生の頃</td> <td style="text-align: right;">21.3</td> </tr> <tr> <td>短大や大学へ入学して</td> <td style="text-align: right;">14.2</td> <td rowspan="3" style="vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="3" style="vertical-align: middle;">47.5</td> </tr> <tr> <td> " を卒業する頃</td> <td style="text-align: right;">28.3</td> </tr> <tr> <td>師範へ入学してから</td> <td style="text-align: right;">5.0</td> </tr> </table>	小学低学年から	5.3	}	11.7	}	52.5	小学高学年から	6.4	中学生の頃	19.5	}	40.8	高校生の頃	21.3	短大や大学へ入学して	14.2	}	47.5	" を卒業する頃	28.3	師範へ入学してから	5.0												
小学低学年から	5.3	}	11.7					}	52.5																										
小学高学年から	6.4																																		
中学生の頃	19.5	}	40.8																																
高校生の頃	21.3																																		
短大や大学へ入学して	14.2	}	47.5																																
" を卒業する頃	28.3																																		
師範へ入学してから	5.0																																		
教職へついた時の気持	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">積極的</td> <td style="width: 10%; text-align: right;">{</td> <td style="width: 10%; text-align: right;">とても</td> <td style="width: 10%; text-align: right;">29.7</td> <td rowspan="3" style="width: 5%; vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="3" style="width: 5%; vertical-align: middle;">76.6</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: right;">{</td> <td>かなり</td> <td style="text-align: right;">29.3</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: right;">{</td> <td>やや</td> <td style="text-align: right;">17.6</td> </tr> <tr> <td>ふつう位</td> <td></td> <td></td> <td style="text-align: right;">11.7</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>消極的</td> <td style="text-align: right;">{</td> <td>やや</td> <td style="text-align: right;">5.5</td> <td rowspan="3" style="vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="3" style="vertical-align: middle;">11.7</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: right;">{</td> <td>かなり</td> <td style="text-align: right;">4.5</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: right;">{</td> <td>とても</td> <td style="text-align: right;">1.7</td> </tr> </table>	積極的	{	とても	29.7	}	76.6		{	かなり	29.3		{	やや	17.6	ふつう位			11.7			消極的	{	やや	5.5	}	11.7		{	かなり	4.5		{	とても	1.7
積極的	{	とても	29.7	}	76.6																														
	{	かなり	29.3																																
	{	やや	17.6																																
ふつう位			11.7																																
消極的	{	やや	5.5	}	11.7																														
	{	かなり	4.5																																
	{	とても	1.7																																
教職を志さすのに影響を与えた人	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">いなかった</td> <td style="width: 10%; text-align: right;">49.4</td> <td rowspan="6" style="width: 5%; vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="6" style="width: 5%; vertical-align: middle;">50.6</td> </tr> <tr> <td rowspan="5" style="vertical-align: middle;">いた</td> <td style="text-align: right;">父</td> <td style="text-align: right;">17.4</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">母</td> <td style="text-align: right;">3.8</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">親類</td> <td style="text-align: right;">4.3</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">恩師</td> <td style="text-align: right;">13.6</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">その他</td> <td style="text-align: right;">11.5</td> </tr> </table>	いなかった	49.4	}	50.6	いた	父	17.4	母	3.8	親類	4.3	恩師	13.6	その他	11.5																			
いなかった	49.4	}	50.6																																
いた	父						17.4																												
	母						3.8																												
	親類						4.3																												
	恩師					13.6																													
	その他			11.5																															

このところ、教職に対する人気が高まっている。安定した仕事である上に、なまの人間を対象とした手造りの性格が強い職業でもある。給与も相対的に高くなっているし、育児休暇などの規定も充実している。これらの条件が教職の魅力を支えると考えられるが、表5の結果も、この傾向を裏書きしているといえよう。

もう一度表4の下欄へ戻るが、教職の場合、教師となるのに影響を与えた人が「いる」と答えた者が50.6%に達した。両親を始め、恩師など心に残る教師の姿を持つことが、教職へつための誘因として機能している。

〈表5〉 年齢・性別×教職へつく気持

(%)

		積極的			ふつう位	消極的		
		とても	かなり	やや		やや	かなり	とても
20代	男	*40.8	18.5	18.5	14.8	3.7	3.7	0
	女	17.9	*32.1	10.7	17.9	7.1	10.7	3.6
30代	男	26.7	*35.6	15.6	13.3	4.4	2.2	2.2
	女	11.1	*38.8	11.1	16.7	11.1	5.6	5.6
40代	男	*32.6	26.5	20.5	9.6	6.0	4.8	0
	女	*49.9	11.1	16.7	16.7	0	5.6	0
50代以上	男	25.9	*29.5	24.1	8.5	6.9	3.4	1.7
	女	*50.0	40.0	10.0	0	0	0	0

2. 教師の生活時間

4分の3が
6時半前に起床

この辺でテーマをかえ、教師たちの毎日の生活を追ってみよう。
教師たちの生活時間は、表6に示した通りだが、平均値を求めて全体としてのプロフィールを描くと以下の通りとなる。

- ① 起床……………午前6時13分
- ② 家を出る……………午前7時12分
- ③ 通勤時間……………平均32分
- ④ 学校につく……………午前7時49分
- ⑤ 在校時間……………9時間59分
- ⑥ 学校を出る……………午後5時48分
- ⑦ 帰宅（まっすぐ帰ったとして）……………午後6時20分
- ⑧ 在宅時間……………4時間35分
- ⑨ 就寝……………10時55分
- ⑩ 睡眠時間……………午後7時間8分

授業の始まる前に、教師間の打ち合わせや朝の会などがあるので、8時前後に学校についていなければならない。そのため起床が6時前の者が4割のように、朝型の生活を送っている者が多い。しかし、学校を出る時刻は早い者で5時前、大半の教師が6時近くまで、学校に残り打ち合わせや会議、クラブの指導などを行っている。そのため、在校時間は10時間に近い。しかも、教師の場合昼休みといっても、生徒と給食をたべたり、話し合いを持ったり、教材の下調べをしたりしているから、10時間が正味の労働時間となる。その上、教師には超過勤務手当が支給されないから、家庭での研修を除いても、少なくとも毎日2時間は余計に働いている計算になる。

〈表6〉 教師の生活時間

(%)

起床時刻	5時半以前	16.3	学校を 出る時刻	4時半前	8.5
	5時半～6時	27.1 (43.4)		4時半～5時	14.2 (22.7)
	6時～6時半	31.2 (74.6)		5時～5時半	19.7 (42.4)
	6時半～7時	20.3 (94.9)		5時半～6時	24.4 (66.8)
	7時すぎ	5.1(100.0)		6時～6時半	13.9 (80.7)
通勤時間	15分以内	14.6	睡眠時間	6時半～7時	12.2 (92.9)
	15～30分	36.2 (50.8)		7時すぎ	7.1(100.0)
	30分～1時間	34.3 (85.1)		10時前	13.0
	1時間以上	14.9(100.0)		10時～10時半	9.5 (22.5)
学校へ つく時刻	7時半前	10.2	10時半～11時	34.2 (56.7)	
	7時半～7時45分	13.9 (24.1)	11時～11時半	15.3 (72.0)	
	7時45分～8時	35.2 (59.3)	11時半～12時	22.5 (94.5)	
	8時～8時15分	26.5 (85.8)	12時すぎ	5.5(100.0)	
	8時15分すぎ	14.2(100.0)			

**余暇の使い方は
テレビ、読書、
教材研究**

昨年、アメリカの学校を訪ねた時、いくつかの市で教師の服務規定を見せてもらう機会があった。授業開始15分前に登校し、終了後15分たったら下校できるという規定が多かった。教師全体の意見交換は、授業の合い間をみはからっても十分可能だという。

社会的な条件を異にするアメリカの事例を一般化するつもりはないが、やはり良い教師であるためには、疲労をしていないことと教材などの下調べを十分にしておくことが不可欠であろう。しかし、在校時間が10時間を超えるようでは、疲労が蓄積しよう。したがって、教員会議の運営を能率的にする、校内の小委員会の統合を図る。授業の終わったあと予定のない教員の帰宅を認めるなどの拘束時間の短縮が必要のように思われた。

〈表7〉 余暇時間の使い方

(%)

テレビを見る (1時間13分)		教材研究 (1時間11分)		読書 (1時間7分)	
30分以内	24.9	30分以内	19.8	30分以内	21.4
30分～1時間	40.4(65.3)	30分～1時間	45.9 (65.7)	30分～1時間	47.8 (69.2)
1時間～1時間半	11.2(76.5)	1時間～1時間半	10.0 (75.7)	1時間～1時間半	8.0 (77.2)
1時間半～2時間	18.1(94.6)	1時間半～2時間	18.0 (93.7)	1時間半～2時間	18.8 (96.0)
2時間以上	5.4(100.0)	2時間以上	6.3(100.0)	2時間以上	4.0(100.0)

帰宅後の教師たちの生活は、ほぼ表7の通りで「テレビを見る」「教材研究をする」「読書をする」が、それぞれ1時間近くを占めている。正直なところ、教師たちのほとんどが毎日1時間以上も読書をしているとは思えないが、こうした感じ方は偏見なのかもしれない。というより、読書をする教師がふえるのは望ましい動向なのであるから、こうした傾向が定着して欲しい気持ちがする。

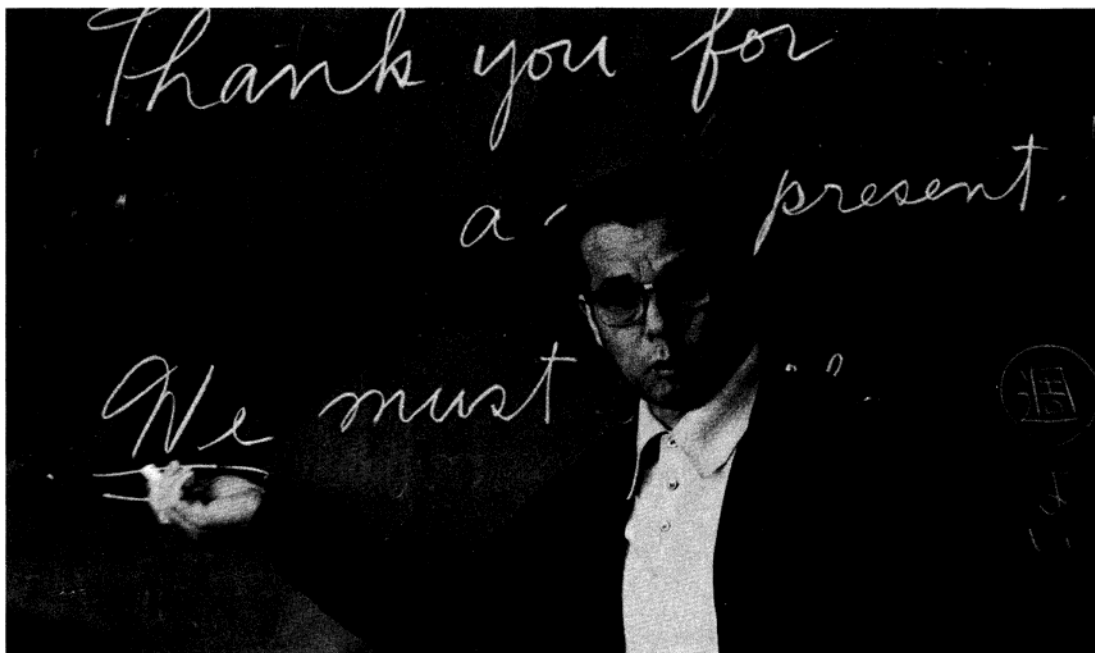
いずれにせよ、帰宅後、就寝までに5時間近くしか残されていない事情を反映して、教師たちの余暇時間は乏しい印象を受ける。毎日の勤務に追われ、人間としての心のゆとりが持てない生活であろう。なお、表8に年代別に生活時間帯の推移を示した。30代の女子に教材研究や読書をする時間が少ないのが目につく。育児や家事に追われているからであろう。しかし、サンプルが少ないので、ここから、生活時間についての一般的な結論を出すのは控えたいと思う。

〈表8〉 年令×生活時間

(%)

		テレビを見る	教材研究	読書
20代	男	1時間11分	1時間11分	1時間1分
	女	59分	1時間17分	57分
30代	男	1時間6分	1時間8分	1時間7分
	女	56分	57分	1時間3分
40代	男	1時間10分	1時間7分	1時間10分
	女	1時間12分	1時間5分	1時間2分
50代	男	1時間10分	1時間8分	1時間15分
	女	1時間30分	55分	1時間15分

教師の仕事とは何か



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません

1. 教師像の自己評価

生徒は教え方の
うまい教師を
望んでいる

いうまでもなく、教師は生徒に教育をするのを仕事としている。そこで、以下教師の教育活動に焦点を据えて考察を進めてみたい。

まず表9に目を通していただきたい。これは、生徒たちがどのような教師を望んでいるのかを推定させた結果である。なによりも「教え方がうまく」「熱心に授業をしてくれる」「ユーモアのある」先生を望んでい

〈表9〉 生徒たちの望む教師像 —教師たちの推定— (%)

	望んでいる		やや望んでいる	やや望んでいない	望んでいない	
	とても	かなり			あまり	ぜんぜん
教え方のうまい先生	48.0	43.0	9.0	0	0	0
	91.0		9.0		0	
熱心に授業してくれる先生	48.5	38.9	11.6	0.7	0.3	0
	87.4		12.3		0.3	
ユーモアのある先生	36.3	45.7	17.0	0.3	0.7	0
	82.0		17.3		0.7	
人間として尊敬できる先生	38.3	41.0	19.0	1.0	0.7	0
	79.3		20.0		0.7	
個人的な悩みの相談にのる先生	35.3	37.3	21.7	2.7	2.7	0.3
	72.6		24.4		3.0	
専門的な知識のしっかりした先生	31.2	42.2	22.3	2.3	2.0	0
	73.7		24.6		2.0	
クラブの指導に熱心な先生	23.9	52.2	21.9	1.0	1.0	0
	76.1		22.9		1.0	
教養の豊かな先生	26.4	39.5	31.4	2.0	0.7	0
	65.9		33.4		0.1	
教育についての信念のある先生	23.0	35.0	36.0	3.3	2.3	0.3
	58.0		39.4		2.6	

ると、教師たちは考えている。「個人的な悩みをきく」や「クラブの指導に熱心」などへの期待は、先ほどの授業に関する項目と比べると、下位に位置している。一口に言って、教師たちは「授業に熱心な教師」を生徒たちが望んでいると考えている。

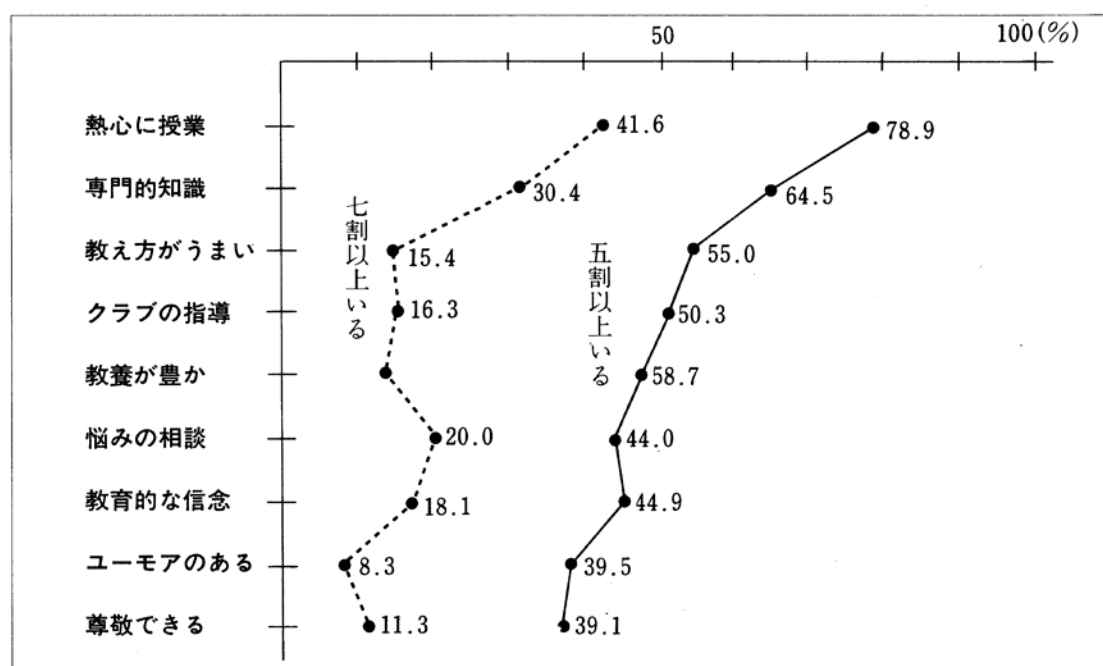
そこで、同じ項目を使い、これらの属性を教師仲間が、どの程度備えているのかを尋ねてみた。結果は表10、図1に示した通りで、「専門的な知識を持ち、熱心に授業をしている教師」は、仲間の中で5～6人という評価である。半数以上の教師は、まじめに授業に取り組んでいるが、残念ながら、10人中の2～3人は熱心とは言いがたいというのである。

〈表10〉 次のような先生がどの位いるか

	10人とも	7～8人	5～6人	3～4人	1～2人	1人もいない
熱心に授業をしてくれる先生	5.3	36.3	★37.4	17.3	3.7	0
専門的な知識のしっかりした先生	4.4	26.0	★34.1	21.6	13.2	0.7
教え方のうまい先生	2.3	13.1	★39.7	26.8	17.8	0.3
クラブの指導に熱心な先生	2.3	14.0	★34.0	33.0	16.7	0
教養の豊かな先生	1.7	12.4	★34.6	32.2	18.8	0.3
個人的な悩みの相談にのる先生	4.0	16.0	24.0	★33.0	22.3	0.7
教育についての信念のある先生	3.0	15.1	26.8	★31.3	23.1	0.7
ユーモアのある先生	1.3	7.0	31.2	★39.7	20.5	0.3
人間として尊敬できる先生	2.3	9.0	27.8	27.8	★31.4	1.7

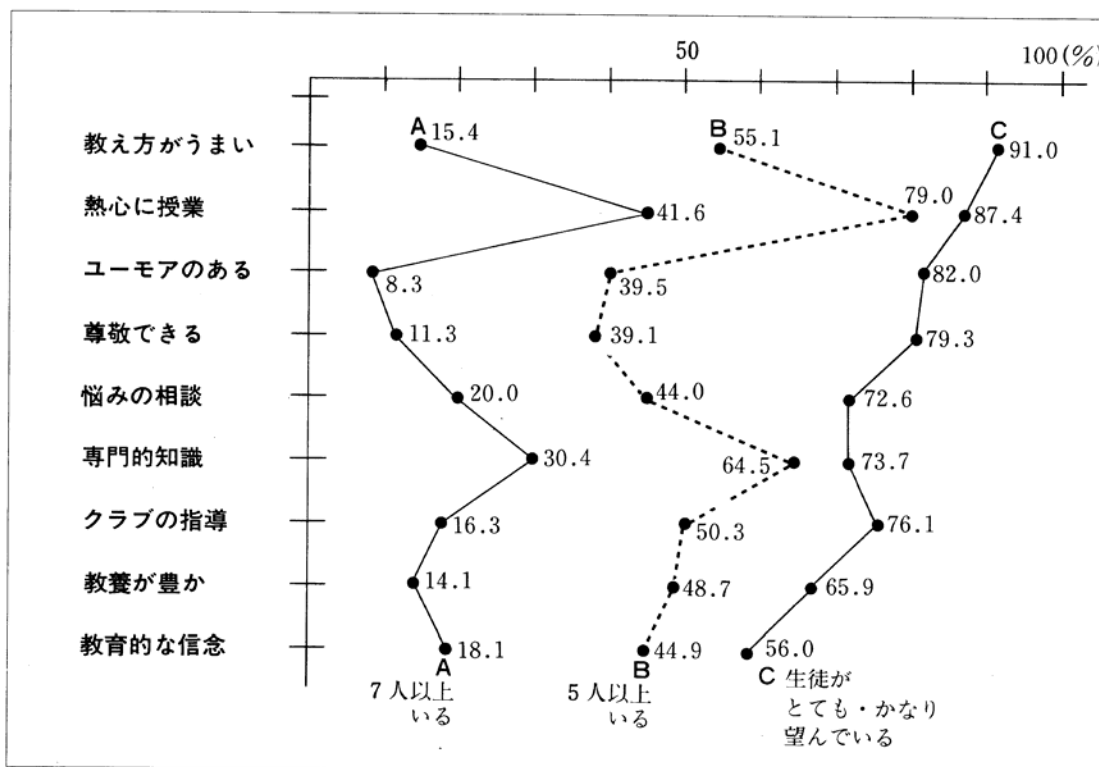
★=最頻値 (%)

〈図1〉 次のような教師はどの位いるか



そこで、生徒の希望と教師の現状とを対比させてグラフ化を行なうと、図2のような結果が得られる。「専門的な知識を持ち、熱心に授業をする教師」という面では、教師の現状は生徒たちの望みにかなり応じている。しかし、「教え方のうまさやユーモア、個人的な悩みを聞く」については、期待に添っていないかもしれないという評価である。

〈図2〉 生徒の望みと教師の現状



**熱心に授業を
しているつもりだ**

しかし、今までの考察は生徒たちの期待と同僚教師に対する評価とを対比させたものであった。そこで、本人の教師としての力量に対する評価を求めてみた。表11が示すように、「専門についての知識を持ち、教育についての信念を抱いて、熱心に授業にとりこんでいる」というのが、自己評価の平均的な姿である。

念の為に項目間の相関係数を表12に掲げたが、「専門的な知識を持ち」「教育的な信念を抱いて」、「教養が豊かで」「教え方がうまく」「熱心に授業をする」の相関が高く、ひとかたまりとなり、「個人的な悩みにのる」や「クラブの指導に熱心」との相関が低い。つまり、多くの教師たちは、教科の専門的な知識に自信を持ち、熱心に授業をしていると自己評価をしている、多くの教師たちの姿を思いうかべると、そうであろうと思う反面、「個人的な悩みを聞く」や「クラブ活動を指導する」など、生徒との個人的なふれ合いに、もう少し力を注いでほしい気持ちがする。もっとも、表13に要約したように、教師たちは、生徒が「教え方がうまく、熱心に授業をしてくれる先生」を望んでいると考えているから、その見方が正しいとするなら、教師たちの態度は、生徒の期待に添ったものともいえよう。

<表11> 教師自身の評価

(%)

	そう思われている		ややそう 思われて いる	ややそう 思われて いない	そう思われていない	
	とても	かなり			かなり	まったく
熱心に授業をしてくれる先生	6.7	44.7	39.9	6.7	1.7	0.3
	51.4		46.6		2.0	
専門的な知識のしっかりとした先生	5.4	34.8	44.2	13.2	1.7	0.7
	40.2		57.4		2.4	
教育についての信念のある先生	8.8	30.3	40.1	17.8	2.7	0.3
	39.1		57.9		3.0	
教え方のうまい先生	1.7	29.3	45.8	17.5	5.4	0.3
	31.0		63.3		5.7	
個人的な悩みの相談にのる先生	6.0	22.5	48.0	15.8	6.4	1.3
	28.5		63.8		7.7	
教養の豊かな先生	2.0	21.5	51.9	19.2	4.7	0.7
	23.5		71.1		5.4	
人間として尊敬できる先生	2.4	22.9	47.1	21.5	2.7	3.4
	25.3		68.6		6.1	
ユーモアのある先生	4.0	25.1	37.1	26.4	6.0	1.3
	29.1		63.6		7.3	
クラブの指導に熱心な先生	6.1	17.2	30.9	26.3	13.1	6.4
	23.3		57.2		19.5	

<表12> 教師としての自己評価(相関係数)

○>γ=0.6>○>=0.5

	教養が豊か	教育的な信念	教え方がうまい	熱心に授業	尊敬できる	悩みの相談	ユーモアのある	クラブの指導
専門的知識	0.692	0.642	0.610	0.580	0.572	0.464	0.315	0.122
教養が豊か		0.689	0.632	0.571	0.671	0.488	0.393	0.203
教育的な信念			0.612	0.574	0.627	0.535	0.341	0.156
教え方がうまい				0.654	0.442	0.394	0.338	0.105
熱心に授業					0.449	0.375	0.272	0.165
尊敬できる						0.481	0.267	0.166
悩みの相談							0.402	0.266
ユーモアのある								0.210

<表13> 生徒の望む教師像と教師の自己評価

	生徒たちの希望	教師の中で	自分自身の評価	(数値は項目間の順位)
教え方のうまい先生	①	③	4	
熱心に授業してくれる先生	②	①	①	
ユーモアのある先生	③	8	8	
人間として尊敬できる先生	4	9	7	
個人的な悩みの相談にのる先生	5	6	5	
専門的な知識のしっかりした先生	6	②	②	
クラブの指導に熱心な	7	4	9	
教養の豊かな先生	8	5	6	
教育的信念のしっかりした先生	9	7	③	

専門の知識についても自信がある

今までのデータを要約すると、全体として、「教えることに熱心な」教師の姿がうかんでくる。これを、年齢別にクロスさせると、表14の通りになる。

しかし、この表では数値の羅列で、理解しにくいと思われるので、サンプル平均に着目して平均値からのプラス・マイナスの数値を示すと、

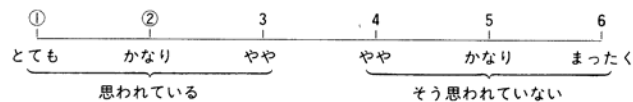
表15のように、教師としての自己評価が教職年数を重ねるにつれて高まっていくのがわかる。「専門的な知識」や「教育についての信念」「授業への取り組み」など多くの面で、若い教師たちは自信を持つことができず、15年目を過ぎる頃から、教師としての自分に自信を抱けるようになる。

〈表14〉 教職年数×自己評価

★=最頻値 (%)

	5年未満	6～10年	11～15年	16～20年	21～25年	26年以上	サンプル平均
熱心に授業	39.0	29.2	26.1	59.6	57.7	★71.0	51.3
専門的知識	22.4	17.1	31.8	44.7	53.8	★56.5	40.2
教育的な信念	15.0	14.6	39.1	48.9	★52.0	56.5	39.1
教え方のうまい	13.3	12.2	19.0	38.3	★46.1	43.4	31.0
個人的な悩みの相談	25.0	12.2	30.4	27.6	33.4	★36.8	28.5
人間としての教養	15.0	4.9	8.7	37.0	24.1	★37.3	23.5
尊敬できる	15.0	9.7	13.0	33.3	28.8	★38.1	25.3
ユーモアのある	25.0	17.1	34.7	31.9	★36.5	30.2	29.1
クラブの指導に熱心	★35.0	17.9	39.1	27.6	11.5	17.1	23.3

表中の数値は下記の尺度の○印を加算したもの



〈表15〉 教職年数×自己評価

(サンプル平均からの加減) (%)

	5年未満	6～10年	11～15年	16～20年	21～25年	26年以上
熱心に授業をする	-12.3	-22.1	-25.2	8.3	6.3	19.7
専門的知識	-17.8	-23.1	-8.4	4.5	13.6	16.3
教育的な信念	-24.1	-24.5	0	9.8	12.9	17.4
教え方がうまい	-17.7	-18.8	-12.0	7.3	15.1	12.4
個人的な悩みの相談	-3.5	-16.3	1.9	-0.9	4.9	8.3
教養が豊か	-8.5	-18.6	-14.8	13.5	0.6	13.8
尊敬できる	-10.3	-15.6	-12.3	8.0	3.5	12.8
ユーモアのある	-4.1	-12.0	5.6	2.8	7.4	1.1
クラブの指導	11.7	-5.4	15.8	4.3	-11.8	-6.2

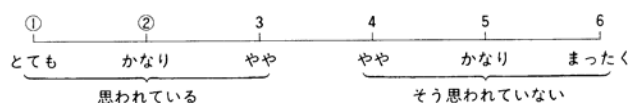
こうした結果を見ると、授業をするためにも、教師には、それなりの年期が必要だという感じがしてくる。もっとも表16によると、そうした教師としての自己評価は、担当教科によって開きがあり、①「専門的な知識」や「熱心な授業ぶり」に自信を持つ＝社会科や数学の教師、②「人間的な面」に自信がある＝英語や国語の教師、③「クラブ活動などに熱心」＝理科や技能教科の教師などのタイプ分けが可能のように考えられる。

〈表16〉 担任教科×自己評価

(%)

	国語	数学	英語	社会	理科	その他
熱心に授業	46.3	*60.5	46.6	●62.8	43.7	48.2
専門的知識	37.8	*47.6	37.2	●51.2	29.7	38.9
教育的な信念	38.9	*46.5	33.3	●53.5	29.1	33.9
教え方がうまい	25.9	●44.2	*39.5	*34.9	23.6	21.1
個人的な悩みの相談	*30.2	*30.3	*32.6	27.9	10.9	●37.1
教養が豊か	*26.4	23.3	21.4	●34.9	16.3	16.7
尊敬できる	*27.8	●30.2	*26.2	21.0	21.8	20.8
ユーモアのある	*31.5	*30.3	20.9	23.2	●34.5	27.8
クラブの指導	16.7	11.7	14.0	16.7	*32.7	●41.5

※=サンプル平均より高い ●=教科の中でもっとも高い



2. 教師になるための年期

かっこうがつく
までに4～5年

今までふれてきたように、教師たちは授業に情熱をもやし、そうした授業を自信を持って行なうためには、それなりの年期が必要だと考えていた。そこであらためて、「教師として、まがりなりにもかっこうがつくまで、何年位かかると思うか」と尋ねてみた。表17のように、教師たちは教師としてかっこうがつくまでに、4～5年の年期が必要だと考えている。しかも、教職年数別のクロス集計が示すように、そうした見方を年輩の教師に限らず、若い教師たちも肯定しているのが目につく。

教育実習をしている学生たちの授業を見ていると、なんとも危かしいと感じることが多い。教えている内容も不確かなら、板書の字も汚ない。それに、生徒集団をリードする力に欠け、指名の仕方も気まぐれという具合で、生徒の方にもとまどいの気配が見られる。この学生たちが教職につき、教材を分析し、わかりやすい形で生徒に提示できるようになるのには、やはり4～5年の年期が必要なのであろう。そうした意味では、表17の結果は妥当な評価といえよう。

しかし表17は、「なんとかかっこうがつく」までの期間を求めたものであるので、「一人前の教師になるための年数」を尋ねてみた。その結果によると、表18のように、教職年数を問わず、一人前の教

師となるのには、短かくとも7～8年、やはり10年位の年期が必要という見方が定着している。

「石の上にも3年」という言い方がある。どのような仕事についても、その道の権威となるためには、10年近い歳月が必要なのであろうが、教職の場合も、教師として安定した授業を展開するのに、やはり10年程度のキャリアが不可欠なのであろう。そしてこの表の中で、若い教師たちが教職にとっての年期の大事さを認めているのは望ましい傾向のように思えた。

〈表17〉 まがりなりにも教師としてかっこうがつくまで

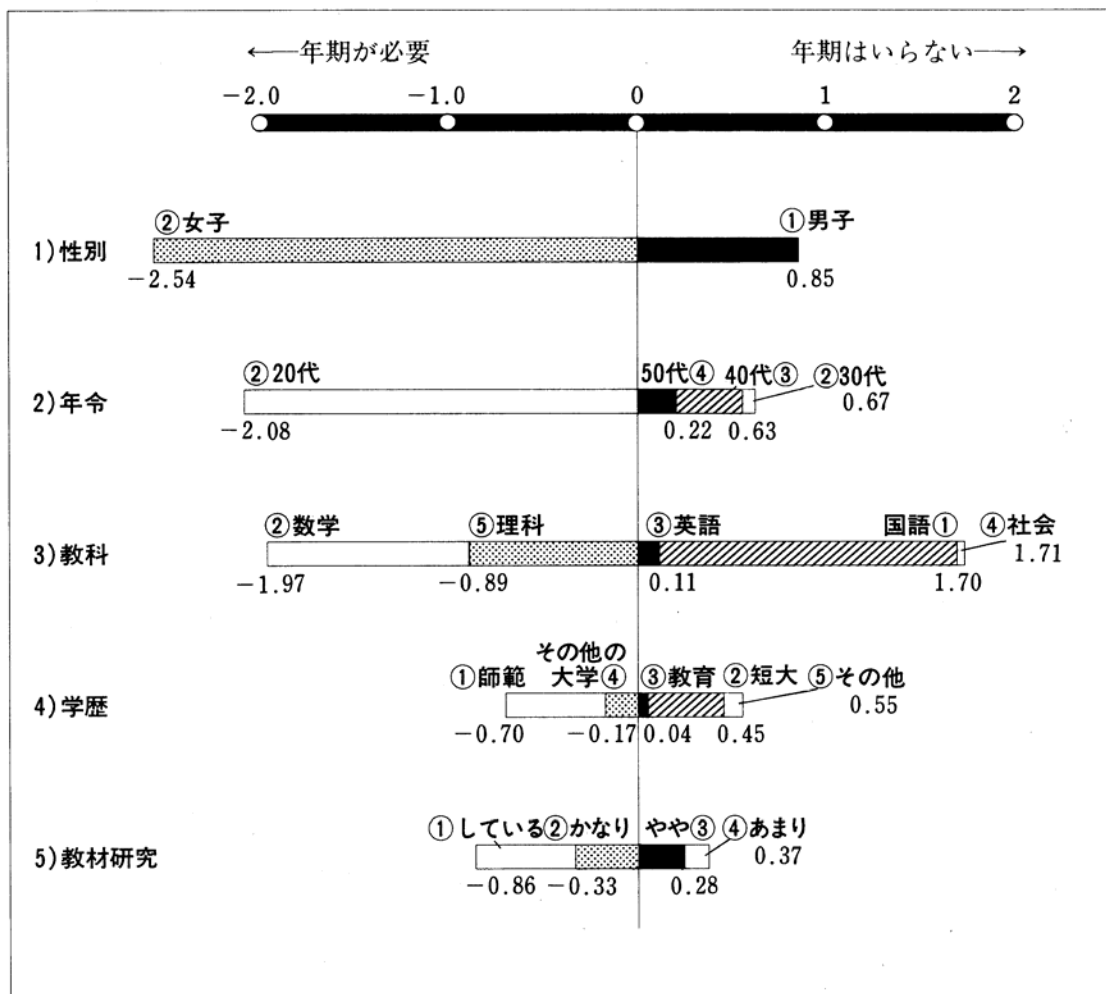
		(%)							
		大学を出てすぐ	3ヶ月	半年後	1年後	2～3年後	4～5年後	7～8年後	10年以上たって
サンプル平均		0.3	0.3	1.3	6.0	28.5	*42.2	13.4	8.0
教 職 年 数	5年未満	0	1.7	0	15.0	26.7	*29.9	11.7	15.0
	6～10年	2.4	0	0	2.4	38.1	*45.2	9.5	2.4
	11～15年	0	0	0	4.3	30.4	*39.3	21.7	4.3
	16～20年	0	0	2.1	4.3	23.4	*55.3	6.4	8.5
	21～25年	0	0	0	2.1	33.3	*45.0	9.8	9.8
	26年以上	0	0	3.9	5.3	23.7	*40.7	21.1	5.3
					9.2				

〈表18〉 一人前の教師になるための年数

		(%)						
		大学を出てすぐに	1年後	2～3年後	4～5年後	7～8年後	10年後	もっとたってから
サンプル平均		0.3	1.3	7.7	24.2	23.5	34.9	8.1
教 職 年 数	5年未満	0	1.7	8.3	21.7	16.7	*33.3	18.3
	6～10年	2.4	2.4	4.9	14.6	31.7	*39.1	4.9
	11～15年	0	0	4.3	17.4	30.4	*43.6	4.3
	16～20年	0	4.3	6.4	25.5	25.5	*34.0	4.3
	21～25年	0	0	7.8	27.5	19.6	*39.2	5.9
	26年以上	0	0	10.5	25.0	23.7	*34.2	6.6

なお、数量化Ⅱ類の技法を使って「1人前の教師となるために必要な年月」の意識を規定する要因を分析してみると、図3のような結果が得られる。20代の女性教員ほど、教職のむづかしさを感じ、一人前となるのに長い年期が必要だと感じているのに対し、30代の男性教員の中で、特に国語や社会科の担当者に、教職に経験をさほど必要でないと思っている者が多い。また、数学と理科の教師が年期の必要性を感じているのは、これらの教科の場合、生徒にわかりやすく教えることのむづかしさを味わっているからであろうか。また、教材研究を重ねている教師たちが、教師における年期の大事さを感じているのも、目をひく傾向であった。

〈図3〉 1人前の教師となるのに



第Ⅳ章

専門職をめぐるって



※写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません

1. 教職の現状と未来

現状は セミ専門職

戦後の30年に限っても、教職をどのように考えるかについて、多くの議論が重ねられてきた。第2次大戦後の「デモ・シカ教師論」に続いて、それまで長い間、教育界を支配していた「聖職者」教師像に対する反論として、労働者論が教育界の主流を占めたこともあった。もちろん賃金をもらって働いているという意味で、教師が労働者としての側面を持つ

のは否定しがたい。そうはいつても、教職は人間を対象とする、しかも法令や規則で定めがたい性格の仕事であるから、単なる労働者論では、教職の本質をつかみがたい。

特に、教師たちの間で、教材編成や教育方法などについての自主性を持ちたいという気配が強まるにつれて、専門職を志向する傾向が生じてきた。

専門職については、さまざまな定義の仕方がある。しかし①高度に体系化された知識や技術の必要とされる職業で、②長い期間の教育訓練を重ねた後に一本立ちできる、③社会的な評価の高い、④職務内容に治外法権的な特権の認められた、⑤職能集団としての内部規律の保たれた職業などの側面が、専門職の特性としてあげられる場合が多い。

そうした特性の中で、教職にとって重要なのは、「職能集団としての自立性」と「教職に対する社会的な評価」の2点であろう。専門職としての地位の確定した医師や弁護士の場合、社会的な評価の高さに裏うちされた形で、職能集団として治外法権的な自立性を確保している。例えば、医師以外の者がメスを持てば、医師法違反の罪に問われる。あるいは、弁護士以外の者が犯人をかくまうと、隠匿罪となるなどである。同じ教育者の場合でも、大学教師は、専門職としての評価が定まっているので、なに

をどう教えるかについて、本人たちの自主性に委ねられており、それだけに、本人も含めた教授集団の自己研修や内部規律のきびしさが望まれる。

このように、その職業に対する社会的な評価と職能団体としての自律性との関係は表裏一体の関係を形づくっている。教職に対する社会的な評価についての概要は、後の「研究ノート」にくわしいが、教職は、現状において専門職としての評価を得るにいたっていない職業である。そのため、教育内容の編成などについての自主性は、教師集団に対して、十分に認められない状況にある。

そうした意味で、教職の現状を専門職を志向しながらも専門職としての地位を確保できない「セミ専門職」(Would-be profession)とみなすのが妥当であろう。

そこで、教職のこうした状況に対する評価を、教師たちに尋ねてみた。表19に示したように、55%の者は教職の現状を「専門職を目指しているセミ専門職」としてみなしている。それに反し、「聖職者」や「労働者」あるいは「サラリーマン」と評価する者は、それぞれ1割以下にすぎなかった。

そして、教職の将来を考えた場合、もっとも望ましい方向は、「専門職の地位の確立した専門職」であるという見方を、80.7%の教師が支持している。もっとも「近い将来の可能性」としては、一足とびに専門職化するのは困難だろうとの見通しが支配的で、すぐに専門職化できると考えている者は3分の1にすぎなかった。

〈表19〉 教職の現状と未来

(%)

	現 状	近い将来の可能性	望ましい方向
専門職を目指しているセミ専門職	★55.1	23.0	4.4
専門職の地位の確立した専門職	15.1	32.1	★80.7
会社員と同じようなサラリーマン	10.1	17.2	0.7
聖職者としての性格の強い職業	7.0	7.4	11.8
賃金をもらう労働者	6.7	6.8	1.0
教育技術売り物とする教育技術者	6.0	13.5	1.4

専門職志向が 8割

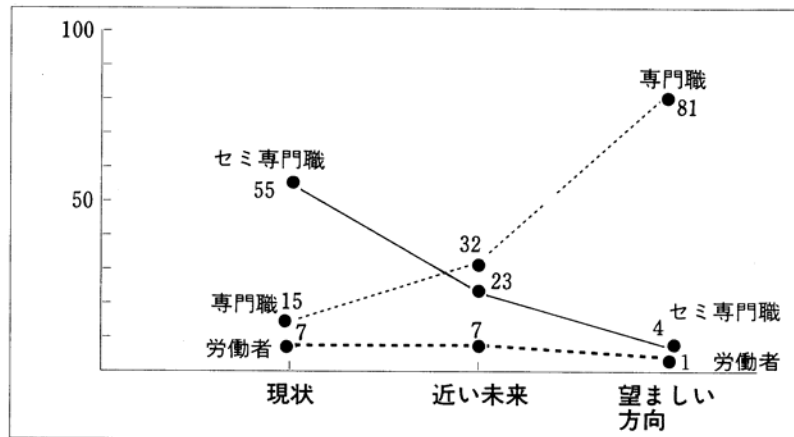
図4に要約したように、現状では、専門職といたいセミ専門職であるにしても、教職は専門職としての性格を強める必要があるとの考え方が、教師の間に定着している。かつて、教職の性格をめぐる「労働者論」と「聖職者論」との間で、はげしい論争がかわされたことがあった。そうした状況を念頭に置くと、このような専門職志向の高まりに、

今昔の感を拭いがたい。

しかも、表20に示したように「現状ではセミ専門職だが、将来は専門職へ進みたい」という見方は、教職年数や担当教科を越えて、すべての教師に共有されている。まさに、専門職への道が教師たちの悲願というような状況である。

表21に、「中学校の先生という仕事は、社会的にどのような評価を受けているとお感じですか」についての結果を掲げた。「精神的に苦勞は多いが、やりがいのある仕事」という見方をしてもらっているが、「社会的な尊敬はあまり高いとはいえない」が、教師たちの反応である。そうであるから多くの教師たちは、教職の現状をセミ専門職として認知しているのであろう。

〈図4〉
教職の現状と未来



〈表20〉 教職の現状と未来×属性

★=最頻値 (%)

		教職年数						担当教科					
		5年未満	6～10年	11～15年	16～20年	21～25年	26年以上	国語	数学	英語	社会	理科	その他
現 状	セミ専門職	★38.2	★71.4	★56.6	★55.3	★58.0	★56.5	★64.8	★53.4	★51.1	★47.8	★62.3	★53.7
	専門職	21.7	9.5	13.0	10.6	20.0	13.2	11.1	7.0	20.9	15.9	7.5	25.9
	サラリーマン	13.3	7.1	13.0	8.5	12.0	7.9	3.7	20.9	2.3	15.9	15.1	3.7
	聖職者	10.0	4.8	0	10.6	4.0	7.9	9.3	7.0	4.7	9.1	3.8	5.6
	労働者	8.3	4.8	8.7	10.6	0	7.9	3.7	7.0	7.0	6.8	9.4	7.4
	教育技術者	8.5	2.4	8.7	4.3	6.0	6.6	7.4	4.7	14.0	4.5	1.9	3.7
望 ま し い 方 向	セミ専門職	3.4	7.1	8.7	6.5	0	4.0	3.8	4.7	2.3	2.3	5.8	7.3
	専門職	★67.8	★83.3	★78.3	★82.6	★84.2	★86.7	★77.0	★76.7	★88.4	★86.3	★84.6	★76.4
	サラリーマン	0	0	0	2.2	2.0	0	1.9	0	0	0	1.9	0
	聖職者	23.7	4.8	13.0	6.5	11.8	9.3	13.5	18.6	9.3	9.1	5.8	10.9
	労働者	3.4	2.4	0	0	0	0	1.9	0	0	2.3	0	1.8
	教育技術者	1.7	2.4	0	2.2	2.0	0	1.9	0	0	0	1.9	3.6

〈表21〉 中学教師に対する評価

—社会的にどのような評価をされていると感じているか—

(%)

	評価されている		なんとも いけない	評価されていない	
	とても	まあ		あまり	まったく
精神的に苦勞の多い仕事	13.5	★54.4	11.5	18.9	1.7
やりがいのある仕事	11.5	★48.0	25.0	15.5	0
社会的に尊敬される仕事	4.4	36.8	★37.5	20.6	0.7
時間的なゆとりのある仕事	13.5	26.4	★28.7	23.3	8.1
経済的に恵まれている仕事	8.4	25.7	★40.2	22.0	3.7
のん気で気楽な仕事	8.2	19.7	★37.4	29.3	5.4

2. 専門職化への道

具体的な
手がかりを
見出せない

そこで問題となるのは教職の未来像が専門職にあると考えた場合、そこへ至るすじ道を、教師たちが、どう考えているかであろう。専門職としての教師像が明確にされない限り、専門職化は画中の餅に終わってしまう可能性が強いからである。

表22が示しているように、専門職化への道として「教育についての見方を深める」が第1位を占め、以下きびすを接する形で、「教材研究を行なう」「生徒の心理を研究する」が続く。確かに教育についての見識を持ち、生徒の心理を理解した教師が、教材研究を重ねて授業に熱心にとりくめば、秀れた教育実践が展開できるのは事実であろう。だが、それらの中でもっとも重要なものは何かとなると、はっきりとした方向性が打ち出されていない。事実、表22の属性別の集計結果でも、教職年数や担当教科を問わず「教育についての見方」と「教材研究」「生徒の心理」「授業の仕方」が、第4位までを占め、専門職を目指すためのすじ道が明らかでない。

〈表22〉 専門職化への内容

(%)

	1項目選択	必 要		ある程度必要 いらない
		とても	かなり	
教育についての見方を深める	28.5	41.0	44.3	14.7
教材研究を深める	20.9	59.2	33.4	7.4
生徒の心理を研究する	16.5	49.7	35.3	15.0
授業のしかたを研究する	14.5	29.7	43.3	27.0
人柄を魅力的にする	7.1	33.8	37.8	28.4
学級集団をリードする技術を高める	5.4	34.5	37.9	27.6
一般的な教養を深める	4.4	41.0	45.2	13.8
社会についての見方を深める	2.7	34.4	37.8	27.8

「教職が専門職化していくために、次のようなことがどの位必要だと思いですか」

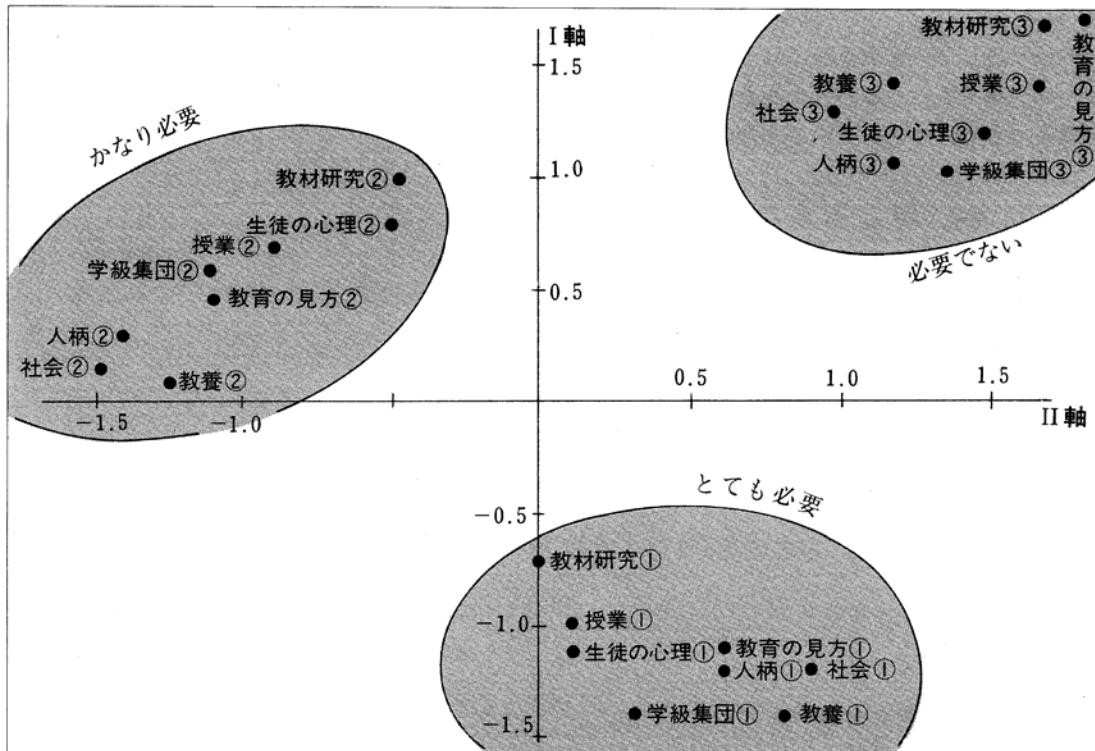
〈表22'〉 専門職化への内容×属性

●=最大値 ※=第2位 (%)

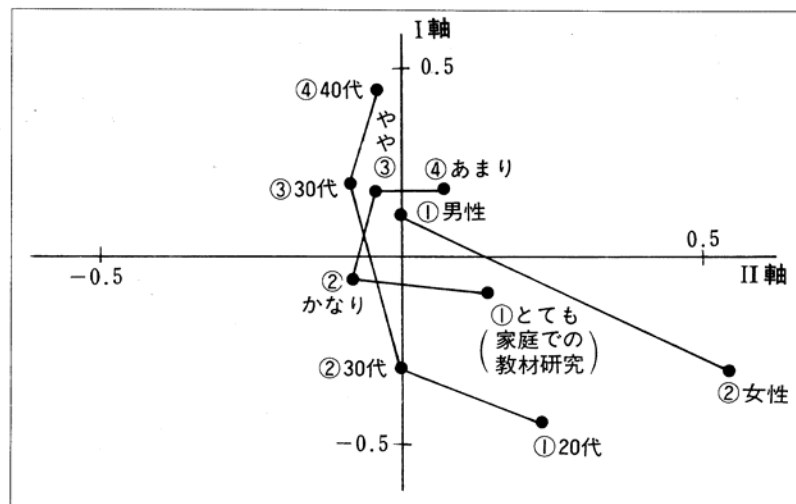
	教 職 年 数						担 当 教 科					
	5年 未満	6～ 10年	11～ 15年	16～ 20年	21～ 25年	26年 以上	国語	数学	英語	社会	理科	その他
教育についての見方を深める	15.0	*17.1	●29.2	●28.9	●33.4	●42.2	●32.8	*18.6	●39.4	●30.2	●33.3	18.2
教材研究を深める	*21.7	●29.2	12.5	20.0	13.7	*23.7	*21.2	●20.9	*16.3	*25.6	*18.5	●25.5
生徒の心理を研究する	●24.9	12.2	*29.2	*15.6	*19.6	6.6	9.6	*18.6	14.0	18.6	14.8	*23.6
授業のしかたを研究する	18.3	9.8	12.5	11.1	17.6	14.5	17.3	14.0	14.0	11.6	14.8	12.7
人柄を魅力的にする	6.7	12.2	12.5	11.1	2.0	3.9	11.5	9.3	7.0	2.3	5.6	5.5
学級集団をリードする技術を高める	6.7	7.3	0	2.2	9.8	3.9	1.9	7.0	2.3	2.3	9.3	9.1
一般的な教養を深める	5.0	4.9	4.1	4.4	3.9	3.9	3.8	9.3	4.7	4.7	0	3.6
社会についての見方を深める	1.7	7.3	0	6.7	0	1.3	1.9	2.3	2.3	4.7	3.7	1.8

そこで、数量化Ⅲ類の技法を用いて、サンプルの意識を分析したのが、図5、図6である。図5が示すように、表22の8つの項目はひとかたまりとなり、「必要」、「かなり必要」、「必要でない」に分かれている。つまりどの項目も、教職を専門職化するのに不可欠というのである。また図6のサンプル・スコアによると、専門職化の必要性を感じているのは、①20代の、②家庭で教材研究を重ねているような、③女性に多い、という結果が得られる。残念ながら図6の説明力はさほど大きいとはいえないので、今後サンプルをふやして、もう一度集計をし直してみることが必要であろう。

〈図5〉 専門職化へのパターン



〈図6〉
サンプル・スコア



教材研究や 授業の仕方は ますますだが

今までの考察を要約すると以下のようなだろう。すなわち多くの教師たちは、専門職化へあこがれにも似た感じを抱いている。しかしそのための方策となると具体的なイメージを持たずに、「教育についての見方」や「生徒への理解」「教材研究」「授業の仕方の工夫」などのいずれもが不可欠という見方をしている。

そこで、今までと同じ8つの項目を使い、「専門職と考えた場合、それぞれの内容を教師たちが平均してどの位身につけているか」を尋ねてみた。表23が示すように、すべての領域とも、「やや身につけている」が最頻値を占め、「十分に身につけている」という回答は1%前後にすぎない。その中で「教材研究を深める」や「授業の仕方を工夫する」の2項目で、「かなり身につけている」の反応が3割前後に達しているのが目につく。つまり、8つの項目の内、教材研究と授業の展開の2つについては、専門職へあと一歩のところまで達している。が、その他の面では、道のりは遠いというのが、教師たちの平均的な気持ちのようであった。

〈表23〉 専門職と考えた場合の力量

—教師たちは平均して—

★=最頻値 (%)

	身につけている		やや身につけている	やや不十分	不十分	
	十分に	かなり			かなり	とても
教材研究を深める	1.4	36.1	★39.0	16.3	5.8	1.4
	37.5		55.3		7.2	
授業のしかたを研究する	1.0	28.2	★39.2	22.4	7.8	1.4
	29.2		61.6		9.2	
学級集団をリードする技術を高める	0.7	17.7	★38.9	31.1	10.6	1.0
	10.4		71.0		11.6	
生徒の心理を研究する	1.0	15.3	★42.2	28.2	11.6	1.7
	16.3		70.4		13.3	
一般的な教養を深める	1.4	14.7	★43.3	28.9	9.0	2.7
	16.1		72.2		11.7	
教育についての見方を深める	0.7	16.3	★37.5	31.6	10.5	3.4
	17.0		69.1		13.9	
人柄を魅力的にする	1.0	8.5	★39.6	35.2	12.3	3.4
	9.5		74.8		15.7	
社会についての見方を深める	1.7	10.9	★36.7	32.0	14.3	4.4
	12.6		68.7		18.7	

〈表24〉 教職についての自信

—あなた自身は—

★=最頻値 (%)

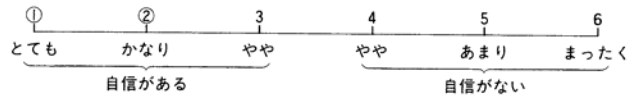
	自信がある				自信がない	
	とても	かなり	やや	やや	あまり	まったく
教材研究を深める	4.4	31.9	★43.8	14.9	4.7	0.3
	36.3		58.7		5.0	
授業のしかたを研究する	4.1	33.6	★41.6	16.3	4.1	0.3
	37.7		57.9		4.4	
学級集団をリードする技術を高める	4.8	23.8	37.4	25.5	6.5	2.0
	28.6		62.9		8.5	
生徒の心理を研究する	3.4	28.2	★42.3	20.7	5.1	0.3
	31.6		63.0		5.4	
一般的な教養を深める	5.1	26.8	★38.9	24.1	4.1	1.0
	31.9		63.0		5.1	
教育についての見方を深める	8.1	28.5	★39.5	18.6	4.4	0.7
	36.6		58.3		5.1	
人柄を魅力的にする	2.0	17.1	★48.1	25.3	6.1	1.4
	19.1		73.4		7.5	
社会についての見方を深める	3.7	24.1	★40.5	25.5	4.8	1.4
	27.8		66.0		6.2	

<表25> 教職についての自信×属性

※印はサンプル平均より数値が高い (%)

		教材研究	授業の仕方	学級をリードする力	生徒の心理	一般的な教養	教育についての見方	人柄の魅力	社会についての見方
教職年数	5年未満	18.4	13.3	13.4	18.3	16.6	15.0	16.7	15.0
	6～10年	14.3	17.1	14.3	9.5	14.2	16.7	11.9	16.7
	11～15年	20.0	30.0	30.0	*35.0	*50.0	35.0	*20.0	25.0
	16～20年	*49.1	*42.6	*38.3	*49.0	31.9	34.7	19.1	*34.0
	21～25年	*46.0	34.0	*36.7	*58.0	*42.0	*48.0	*20.9	24.5
	26年以上	31.3	*46.0	*36.8	*48.7	*42.1	*52.6	*23.7	*43.4
担当教科	国語	20.8	24.5	30.2	*30.1	30.2	26.4	15.4	18.9
	数学	*42.9	*52.4	*33.4	*38.1	*38.1	*52.3	*23.8	23.8
	英語	*42.9	*47.7	31.0	*31.0	*38.1	*45.2	19.1	*31.0
	社会	*52.2	*43.2	29.5	*45.4	*40.9	*52.2	20.5	*59.1
	理科	29.7	31.5	26.4	18.9	26.0	39.7	13.2	18.9
	その他	35.8	32.1	18.8	24.5	22.7	22.7	17.0	18.9
サンプル平均		36.3	37.7	31.6	28.6	31.9	36.6	19.1	27.8

表中の数値は○印の占める割合



しかし、表23は教師全体についての評価であったので「あなた自身」にしばって自信の有無を尋ねてみると、表24のような結果が得られる。この場合も表23とほぼ同じように、「教材研究」や「授業の仕方」に自信が認められるが、その他の面では「自信がややある」程度の自己評価にとどまっている。また表25の結果でも、①教職年数が15年を越える教師と、②数学や社会科、理科の教師に、教職への自信を持つ教師がふえているが、この場合でも「とても、またはかなり自信がある」者の割合は、4～5割の数値に達したにすぎなかった。

3. 生徒への理解

教師が思っているほど、休み時間は楽しくない

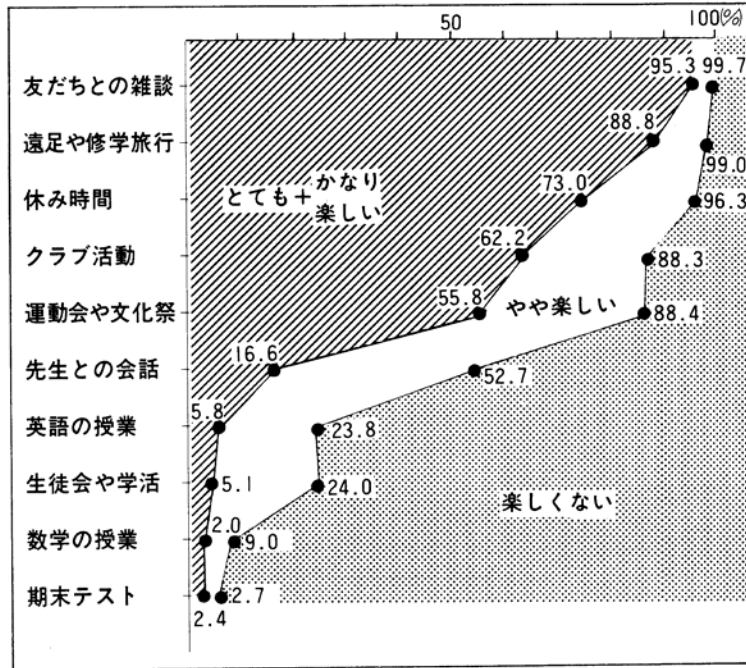
つきつめていくと教師たちは、授業についての面で、自信を持っているが、その他の面は、まだ努力が不十分との自己評価をしている。

そこで、教師たちの見方がどの程度確かなのか、生徒に対する理解を素材として問題を深めてみたい。図7は「学校生活の楽しさを生徒はどのように感じているか」を、教師たちに推定させた結果である。

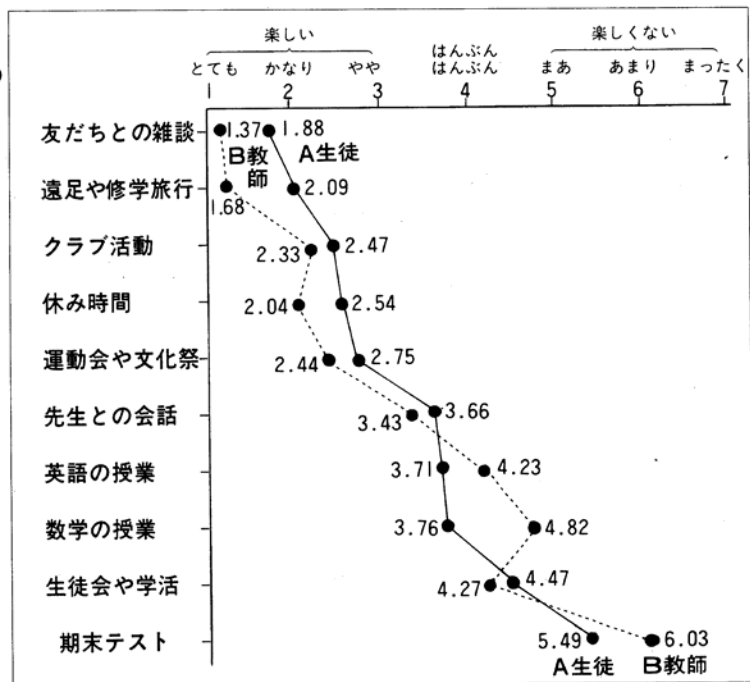
「友だちとの雑談」や「休み時間」が楽しく、「数学の授業」や「期末テスト」はつまらないだろうというのが、教師の推定であった。

モノグラフ「中学生の世界」の別の号（Vol.1 「学校生活の楽しさに関する考察」）に、同じ項目を使い生徒たちに意見を求めているのがある。その結果と教師たちの推定とのずれを示すと図8の通りとなる。

〈図7〉
学校生活に対する推定



〈図8〉
学校の楽しさについての
教師と生徒のずれ
(平均値)



全体として教師たちの見通しは、生徒の気持ちをかなり正確につかんでいる。実線と破線のプロフィールが、ほぼ軌を一にしているのがその例証となろう。だがもう少し細かく目を通すと、教師たちの思っているほど、「休み時間」や「友だちとの雑談」が楽しみと知っている生徒は多くない。反面、教師が感じているほど、「テスト」や「期末テスト」を嫌っている生徒も多くない印象を受ける。

ただし図8は平均値の形で対比を試みたため、開きが明瞭にならない可能性が強いので、%の形で数値の開きを示すと、表26の通りとなる。つまり「雑談」や「休み時間」を楽しみと思わない生徒がいる反面、「テスト」や「数学の授業」に楽しさを感じている生徒も少なくない。その意味において教師たちの目は、生徒集団全体の感じをほぼつかんではいるが、個々の生徒の心情までは汲みとっていない印象を受ける。

〈表26〉 楽しさについてのずれ

(%)

		楽しい			半分半分	楽しくない		
		とても	かなり	まあ		まあ	あまり	ぜんぜん
友だちとの 雑談	生徒	50.5	25.3	14.9	6.7	1.2	0.6	0.8
		75.8		22.8			1.4	
教師	68.5	26.8	4.4	0.3	.0	0	0	
	95.3		4.7			0		
休み時間	生徒	28.2	21.0	30.7	13.3	3.5	2.0	1.3
		49.2		47.5			3.3	
教師	27.4	45.6	23.3	2.7	1.0	0	0	
	73.0		27.0			0		
数学の時間	生徒	8.6	10.1	30.9	26.6	7.9	8.2	7.7
		18.7		65.4			15.9	
教師	0.3	1.7	7.1	35.2	25.5	23.1	7.1	
	2.0		67.8			30.2		
テスト	生徒	2.3	2.8	6.4	18.5	12.0	18.2	39.8
		5.1		36.9			58.0	
教師	7.7	1.7	0.3	7.8	14.9	29.7	44.9	
	2.4		23.0			74.6		

**生徒の心情に
対する
理解に欠ける**

そこで、もう少し生徒の心情に近い項目を提示して、教師たちが生徒の気持ちをどの程度わかっているのかを尋ねてみた。表27に示したように、ほとんどの教師は「このままふっと死んでしまいたい」あるいは「自分なんか生まれてこなければよかった」と思っている生徒は、「ひとりもない」、いたとしても「10人中の1～2名」だと予想している。

この項目についても、「モノグラフ・中学生の世界」Vol.5「学業不振とその背景」で、同じアイテムを使った設問を行なっているので、その結果を紹介してみよう。(表28)

「ふっとこのまま死んでしまいたい」あるいは「自分なんか生まれてこなければよかった」と、「しょっち

〈表27〉 学校に対する生徒の気持 —教師たちの推定— ★=最頻値 ☆=第2位 (%)

	ひとりも いない	1～2 人	3～4 人	5～6 人	7～8 人	10人中 10人
ふっと、このまま死んでしまいたい なあと思うことがある	☆36.7	★55.9	4.9	2.5	0	0
自分なんか生まれてこなければよか ったと思うことがある	☆25.7	★63.0	6.7	3.5	1.1	0
1人で、どこか遠くへ行ってしまう たいと思うことがある	☆20.1	★62.6	12.7	3.5	0.7	0.4
小さな頃を思うとあのころ自分は幸 せだったなあと思うことがある	9.2	★44.1	☆21.9	13.1	11.0	0.7
このまま、おとなになっていくこと がとても不安だと思ふ	7.7	★42.2	☆29.1	14.7	6.3	0
きょうは、学校へ行きたくないと思 うことがある	4.5	★71.5	☆15.0	5.9	3.1	0

〈表28〉 現実逃避願望の芽ばえ —生徒の気持— (%)

	しょっち ゆうある	時々ある	たまに ある	1、2度 はある	まったく ない
小さい頃を思うと、あのころの自分は幸 せだったなあと思うことがある	19.0	16.6	22.7	17.1	24.6
	35.6		39.8		
一人で、どこか遠くへ行ってしまう たいと思うことがある	12.9	18.1	20.3	21.2	27.5
	31.0		41.5		
きょうは、学校へ行きたくないと思 うことがある	8.9	15.0	28.2	28.8	19.1
	23.9		57.0		
このまま、おとなになっていくことが、 とても不安だと思ふことがある	9.5	15.3	22.5	20.7	32.0
	24.8		43.2		
自分なんか生まれてこなければよか ったと思うことがある	8.6	10.1	14.4	20.4	46.5
	18.7		34.8		
ふっと、このまま死んでしまいたい なあと思うことがある	9.2	9.6	12.8	18.3	50.1
	18.8		31.1		

ゆう」または「時々」思う生徒は、2割に達しており、「小さい頃しあわせだった」と感じている生徒も36%に及んでいる。したがって、教師が考えている以上に、生徒たちは悩みを抱えているのである。このような生徒たちの心情を理解できないでいる教師が少なくない。

4. 若干の考察

専門職に 求められるもの

この調査の実施にあたり、教職の専門職性を焦点に据えて項目を選ん
でみた。教師が実力を蓄え、実績を社会的に評価してもらうことが、学
校をめぐるさまざまな問題を解決するための、遠回りかもしれないが、
最善の方法と考えたからである。

そして、すでに紹介したように、教師たちの専門職への願いは、予想
をはるかに上回るほど強かった。教師たちが専門職として実力を蓄えることの必要性を感じている証

拠であろう。

しかし、くり返し指摘してきたように、専門職化への道は混迷し、具体的な方策を見出していないようであった。これでは現状のセミ専門職からの脱皮は困難といわざるをえない。このアンケート結果に示されているように、確かに「教育についての見方を深め」、「生徒の心情を理解しながら」、「教材研究を掘り下げて」、「熱心に授業に取り組む」ことが必要なというまでもあるまい。だがそこから一步踏み込んで、4つの条件の中で、最も必要とされるのは何かについての合意が形づくられていないのである。

多くの教師たちは、「教材研究」と「熱心な授業」とに、ある程度の自信を抱いていた。今後も、その面の研修を深めていくと考えられる。いわば「教える人」という側面を強調する方向である。中学校は教科担任制であるから、英語の教師が熱心に英語を教え、数学の教師が数学の授業に取り組んだ場合、その学校が生徒にとって充足感を抱ける場となり、また親たちはそのような教師の姿を専門職とみなすのであろうか。

授業が下手で意欲に乏しい教師は、教師として失格者である。その意味で、熱意を持って、授業に取り組む教師の姿勢が望ましいのはいうまでもない。

だが、登校拒否や学校内暴力をはじめ、非行や進学をめぐる問題など、現在の中学校が問われているのは、生徒の心情をいかに理解し、教育的にどう対処すべきかであろう。改めてふれるまでもなく、中学生は思春期の心の揺れ動く年齢に属している。共通に受け入れた生徒たちを、それぞれの形で進路を見きわめて送り出す責務を中学校は担っている。この過程で、生徒たちは思い悩むことが多いだろう。

こう考えてくると、中学校の教師に何よりも望まれるのは、生徒に対する理解力を増すことのように思われる。生徒の気持ちと離れた授業であっては、たとえ教材研究を重ねたとしても、その努力は水泡に帰そう。本調査の結果ではさほど顕著でなかったが、生徒を教える対象とみなし、生徒の気持ちをトータルとしてとらえようとしない教師が少なくない。この調査でも、クラブ活動の指導や生徒の悩みを聞くのに意欲を示す教師は多いとはいいがたかった。いろいろな場面を利用して、生徒とふれ合い、生徒たちの気持ちを理解することが望まれる第一の条件であろう。

それと同時に、中学教師は非行や進学など、多くの問題で社会的な視野を必要とされる職種である。生徒規則の扱いひとつにしても、教師集団の良識が疑われる学校が少なくない。また、学歴社会の行方に関心のまま高校進学の相談にのる教師も多い。それでは、進学相談は受験の技術論となってしまう、親たちからの信頼を得ることは難しいだろう。

親たちと一味違った教育的な見識を持ち、親たちと異なった深い洞察力を生徒に対して持っている。このような教師に対してならば、親たちの間に専門職として評価する態度が育ってくるだろう。授業の充実、生徒への理解と教育的な見識の上に築きあげるべきものと思う。教師たちの現状を考えると、教師としての基礎を固めずに、授業にのみ傾斜している印象を受ける。それでは、教育技術者になり得ても、専門職性への展望は開けてこまい。教科の教師であるよりも、まず、なま身の生徒を指導するひとりの教師としての意識を持つ。こうした方向が、専門職を可能にする方向のように思われなければならない。

付．研究ノート

教師研究の動向と課題

はじめに

古くから「教育は人なり」といわれ、その「人」とはふつう教師を意味していた。そしてまた、きわめて多くの者が教師について論じている。手許に昭和24年から42年までのほぼ20年間に発刊された教師に関する邦文の文献をリストアップした報告書がある（注1）。今、その中から著書と論文を拾ってみると、著書で約400、論文になると3,000を優に越えている。この数は今から13年ほど前の集計であり、その後もかなりの論文が発表されている。

しかし、教師に関する文献が多いことは、必ずしも教師研究が実りあるものとなり、日々の教育活動に有益となっていることを意味しない。逆に、論文が多いと玉石混淆となり、どれが有益で示唆に富むものなのか、判断に苦しむ場合もある。かくて、本稿は主に、戦後発表された教師に関する文献を一定のフレームワークを設けて整理し、領域ごとの研究動向を素描し、それから今後に残された課題を提示しようとするものである。しかし、選択にあたり一定の枠を設けたので、当然ながらここで取りあげられなかった研究が他にあることをお断りしておきたい。

さて、今までの教師研究はどのように整理されているのであろうか。沢田慶輔（注2）は、昭和28年「教師と生徒の心理」の中で、わが国の当時までの教師に関する諸論を9つの領域に分けている。先駆的な意味も持ちうるので、煩雑になるかも知れないが簡単に紹介してみる。

- (1) 教師論に関するもの
- (2) 教師に関する伝記的研究
- (3) 教師についての事例研究
- (4) 教師自身を対象とした調査研究
- (5) 児童、生徒から見た教師の好き嫌いなどに関する調査研究
- (6) 児童・生徒が教師を描いた綴方をまとめた研究
- (7) 教師の心理、教師の評価などに関する研究の解説、評論など
- (8) 生徒による教師の教育活動についての思い出話
- (9) 現場の教師の実践記録

このように沢田の分類は、概括的であるがここから萌芽的ながらも教師研究の2つの立場を見いだすことができる。1つは、教師の教育活動を価値的、個性的にとらえ、それは人まねのできない名人芸とみる立場である。もう1つは、教師の教育活動が価値的な側面を含み個性的であることを認めながらも、教師行動を説明する理論モデルをつくり、それを経験的に検証してモデルの一般化を計ろうとする立場である。前者を価値・規範的アプローチと呼ぶなら、後者は事実即した経験科学的アプローチといえるであろう。

ところで昭和28年以後、主流を占めたのは、価値・規範的アプローチであるが、実証研究の色濃い論文の数も増えて来ている。こうした状況の下に、伊藤（注3）は、昭和48年社会学的なアプローチの文献を、次の4つの領域に分けて目録をつくっている。

- (1) 教師の社会的地位に関するもの

(2)教職意識と教師役割に関するもの

(3)教師組織と教師集団に関するもの

(4)教員団体の機能に関するもの

さまざまな実証的アプローチのうちから社会学という1つの方法に依拠した分類枠は、教師研究の到達点と不十分性をはっきりさせる、というメリットはある。しかし、この分類枠で十分かというところではない。そこには、教授を中心とした教師の教室行動を含めた教師行動の領域が欠落している。この領域は、教育心理学や社会心理学とともに、教育社会学も比較的得意とした分野で、研究もある程度蓄積されている。また、昭和44年頃から一層続出しはじめる女教師問題の領域も無視されている。現在、初等教育における女教師の占める割合の大きさを考えるとこれは避けて通れないテーマである。

そこで、教師研究の動向と課題は次の5領域に則して、レビューしていくことにする。

(1)教師の社会的地位

(2)教師の職業的社会化

(3)女教師問題

(4)教師集団とモラル

(5)教師行動の研究

1. 教師の社会的地位

昭和50年現在、日本の義務教育に従事している教員数は65万人である(注4)。明治6年の東京師範学校の卒業生は10名であった。この1世紀あまりの間に教員の数は膨大に増えているが、教師の社会的地位も教員の数と同時に変化しているのである。

教師の社会的地位の変遷を扱った代表的なものとして、唐沢富太郎「教師の歴史」(注5)、石戸谷哲夫「日本教員史研究」(注6)などがある。それらによると、明治初期においては、師範生の出身階層は士族が多く、彼らは卒業後必ずしも教師になるとは限らなかった。むしろ、末は博士か大臣かと青雲の志を抱いて入学し、実際、政界や実業界に進出して中枢の人物となった者もいる。

ところが、威信の高かった教師の地位は、明治中期から末期にかけて教員数の増大や待偶の劣悪さ、それに農家出身者が士族に代って主流となったことが重なって、下降の一途をたどっていく。この時期、上級学校への夢を経済的な理由から断たれ、やむなく教師の道を選び、屈折した教師生活を送らざるを得なかった青年像を描いたものに、田山花袋の「田舎教師」や石川啄木の「雲は天才である」などがある。そして、このような教師の社会的地位の下降現象は、中等教育が整ってくる大正期にピークとなる。昭和初期の不況のとき、師範学校の競争率が高くなって地位の低さが多少歯止めはされるものの、その状態は戦後まで続くのである。

それでは、戦後はどうなったのであろうか。教員養成は、戦前の反省から専門学校でなく大学で行うことになったが、教師の地位も自動的に上昇したのであろうか。

湖木（注7）の研究によると、戦後の新しい制度は、教官や施設の弱体という問題だけでなく、きわめて少ない学生の応募という悩みに直面する。例えば、昭和24年教員養成大学の入学者は定員の56%という状況であった。その後、新制高校の卒業生が増加し大学進学熱が高まるにつれて、志望率も相対的に高まってくる。しかし、競争率は依然として低く昭和33年がもっとも顕著で、2.5倍である。同じ年、永井道雄他（注8）は「教師」の中で、不況になると教職に目をむける学生の就職動機に着目して「デモ・シカ」教師の出現を予想している。

ところで、社会はこうした状況の下で教師の社会的地位をどのようにみていたのであろうか。昭和30年、尾高邦雄を中心として日本社会学会が、6大都市の住民を対象にして30種類の職業の威信評価調査を実施している（注9）。それによると、第1位は府県知事、2位は大学教授、3位は裁判官であり、小学校の教師は11位で新聞記者とお寺の住職の中間に位置づけられている。そして、教師の地位は20年後も大きな変化を示していない。昭和50年、日本社会学会は82の職種を示して職業の威信調査を実施している（注10）が、そこでは第1位は裁判官、2位は大会社の社長、3位は大学教授、小学校の教師は18位で新聞記者（16位）、中小企業の経営者（17位）と土木建築技術者（19位）、レントゲン技師（20位）の中間に位置している。このように、社会は、戦後から今日まで教師は専門職よりセミ専門職の位置に近いとみているのである。

池田（注11）は、社会の高学歴化にともない教師の地位はどのように変化していくのかを次のように考察している。昭和40年代になるとほとんどの教師は大学レベルの教育を受けている。しかし、昭和46年の大学進学率は27.9%で、昭和初期の中等学校の進学者は、約20%どまりであった。したがって、戦前師範学校を卒業したもののほうが、きびしい社会的選抜をくぐりぬけたことになる。大学卒の教師が増大したことは、必ずしも教師の地位を高めることを意味しない。池田はさらに、高学歴のものほど教師を低く評価するデータを提示して「社会の学歴が上昇すればするだけ教師の地位と威信は下降するのである」と述べている。

こうして、教師の社会的地位に関する研究は、教員養成の充実とは逆に教師の地位の相対的な低下傾向を明らかにし、高学歴化社会における教員養成の困難さと重要性を示唆する。

2. 教師の職業的社会化

高学歴化社会においては教員養成のあり方がますます重要となってくる。しかし、それを正面から取りあげた研究は、数えあげるほどしかない。著書として目にとまるものは、中島太郎編「教員養成の研究」（注12）や海後宗臣編「教員養成」（注13）、それに中内敏夫他編「教員養成の歴史と構造」（注14）ぐらいである。これらは、ともに制度史的な視点から教員養成の変遷を明らかにしている。

ところが、教員の養成を考える時、制度史的なアプローチとともに無視できないものに、ある人がどのようなプロセスを経て「一人前」の教師になっていくのか、という職業的社会化の視点がある。この領域の研究は、重要なわりにはあまり蓄積されていないが皆無ではない。従来、職業的社会化の

概念は①ある職業に就く以前の態度の形成過程（予備的社会化）と②職業に就いた後の態度の変容過程（職場での社会化）とに分けられる。したがって、研究動向は便宜的に2つに分けて紹介する。

(1)教師の予備的社会化

さて、どんな人がどのような動機から教師になろうとしたのであろうか。その歴史的な変遷は前掲の唐沢や石戸谷の研究に譲るとして、ここでは戦後の学生を対象とした研究に限定する。

市井らの研究(注15)によると、戦後10年間の愛知学芸大学は、ほとんど県都内の出身者によって占められており、出身階層は農民層がトップで3割、父兄の学歴は小学卒と中等学校修了者が主流である。また、入学動機をみると、受験のとき学芸大学に魅力を感じたものは少なく、他大学を第一志望としたものは、6割を越えている。教師への強い志望より、自分の学力や家庭の事情から「やむをえず」入学したものが多い。かなりのものが強い挫折感を抱き、入学後も動揺し苦しんでいる。ここに、学芸大学生に固有な挫折感と無気力さが生じてくる土壤があるとしている。

以後、この論文に触発されて教職選択の動機を中心とした学生の教職意識に関する研究がすすめられる。例えば、日米の学生を対象としたもの(注16)から、徳島大(注17)、静岡大(注18)、三重大(注19)、千葉大(注20)、愛知教育大(注21)、福岡教育大(注22)、東京学芸大(注23)の学生を対象にした研究がある。これらは、ともに市井らの論文から10年を経たのちに発表されたものである。

今、これらの研究を総合して昭和45年以降の学生の出身地域、階層、それに入学動機を要約してみる。まず、出身地域は首都圏にある大学は別として、6～9割が地元県の出身者である。また、出身階層は今まで主流であった農林業層は1～2割と少なくなり、会社員、公務員層が4～5割と主流になる。なお、教員、専門管理者層はともに1～2割である。こうして、教育系大学は地元的性格を帯びながら都市的中間層の出身者によって占められつつある。

次に、彼らの入学志望度と動機を整理すると、第一志望のものは「一期校」で6～7割、「二期校」では4～5割となっている。そして入学動機は、「国立大学である」「自分の学力にあっている」「自宅から通学できる」などが多い。教育系大学は目的性の強い大学であるが、入学動機を見る限り学生の目的意識はあまり高いとはいえない。このことはまた、入学時の教職志望度からも説明できる。入学時、教職に就きたいと答えたものは、各大学ともほぼ5～6割で、1年次から教職以外の途を考えているものは2割前後もいる。

ところで、教育系の学生は卒業後、ほとんどのものが教職に就いている。とすると彼らは4年間、どのようにして教師としての社会化がなされていったのであろうか。この種の研究は乏しいがその成果の一端を示すと、入学時あまり高くなかった教師志望度は、2年次になるとさらに減退するといわれる(注24)。しかし、3、4年次の教育実習を体験すると教職に対する構えが鮮明となり、そこから得た自分のパーソナリティ特性が教師に向いているか否かという判断が、教職志向を強く規定するとも言われている(注25)。

これらのことから、大学生活のあり方や教育実習が教職志向にインパクトを与えることは、うかがえる。ところが、それらがどのような学生にどのような影響を与え、卒業後の進路決定にどれほどの

役割を果たすのか、などは不明である。大学4年間の影響の体系化がはかられていない。ここで必要とされる視点は、大学教育の影響力の単なる総計ではなく、個々の学生が大学の顕在的ならびに潜在的なカリキュラムを内面化しながら、どのように態度を変容させていくのか、の解明である。

(2) 職場での社会化

さて、さまざまな形の子傭的社会的化を経て、教職に就いたものは、職場ではどのように社会的化されているのであろうか。普通、子どもが大人になっていく時、だれかモデルとなる人物がいるといわれる。そのことは、教師が「一人前」になっていくときにもあてはまるだろう。教師は、集団やある人物の価値・規範を判断の枠組にして教育活動の方向づけを行う。

麻生(注26)は、東京学芸大の卒業生を対象にして、どの年齢のものがどんな集団を準拠集団としているのか、という視点から調査を行い、4つのモデルを提示している。Aモデルは20、30代の男性で行政当局や父兄よりも教師集団の価値・規範を優先させ、Bモデルは、20、30代の女性で職場の仲間と家族が支えとなっている。また、Cモデルは40、50代の男性で行政当局の価値・規範を重視し、同じ年齢の女教師は行政当局、家族、職場の仲間のどれも均等に重んじているDモデルである。

次に、河上(注27)は大阪府下の小中学校の40才以上の男性教師を対象として、職場の地位による意識の変化を明らかにしている。それによると、学校組織は管理の原理と教育の原理の2つの構造からなり、次期管理者候補の主任層は、非管理者層と同じ教育の原理に支配されている。そして、そのことは彼らが多くの授業を担当していることに起因するらしい。これらの研究は、教師がどの集団の価値・規範を内面化しているのかを明らかにしているが、社会的化のプロセスにはあまり触れていない。

田中(注28)は、1950年代の終わり頃から米国で始まった新任教師の社会的化研究に触発され、経験年数5年未満の者を対象として、次のような「教師になる。過程を明らかにしている。①新任教師は一般的に規定していた教師役割を学校組織に期待される役割へと再規定して職業的一体化を確立していく。②その役割の再規定においては、同学年の学級担任と同教科担当の教師が準拠する人物となる。③また、インフォーマルな集団が、緊張した心理を安定させ、学校のしくみや教授の相互習得の場にもなっている。

また、永井(注29)は田中の研究に日本における先駆的な役割を認めつつ、社会的化を文化とのかかわりから学校集団の構造と結びつける視点に乏しいと批判し、教師の社会的化を「教員文化」の内面化と捉える必要性を説いている。そして、東京都の小学校教師を対象にして、どのような「教員文化」があるかを明らかにしようとして、次のような結果を得ている。まず①教員文化の基調は、学年と同僚との調和を乱さないことで、同僚の高い評価は教授能力によって決まる。次に②高年齢者と主流大学(師範卒)出身者に学校の現状を肯定するものが多く、女教師は批判的であるが軋轢をおそれて不満を表明しない。それから、③教師の職業的社会的化プロセスにおいて、自己の将来の地位に対する他者や自己の予測が大きな影響を与える、という仮説を提示している。

職場での社会的化プロセスは、子傭的社会的化に比べて複雑なものである。その上実証的研究がしにくいという側面がある。したがって、研究が乏しく仮説を提示するにとどまっているというのが実情であろう。今後は、実証的データを集める作業と同時に、それを体系づける枠組の構築が必要となる。

モデル理論や準拠集団理論を教師研究にも適用し、予備的社会化を経たものがどのようにして「一人前の教師」になっていくのか、という継続的な研究が重要な課題となるであろう。

3. 女教師問題

昭和44年、小学校教師の中で女教師の占める比率が5割を越え、ジャーナリズムが「女教師時代の到来」と呼び、その後さまざまな論議が輩出している。しかし、今日まで女教師を正面から扱った著書は思いのほか少ない。教師に関する歴史的な研究においても、女教師は補足的にしか扱われていない。この視点から著書としてまとめられているものは、例えば中内敏夫・川合章編「女教師の生き方」(注30)、木戸若雄「婦人教師の百年」(注31)、高群逸枝「女教員解放論」(注32)など数えるほどである。また、教育社会学的な研究も数少ないが示唆に富む研究がある。今、それらを発表された順に列挙すれば、森孝子「女教師の需要と養成の問題」(注33)、池田秀男「女教師の職業意識に関する調査研究」(注34)、深谷昌志・和子「女教師問題の研究」(注35)、深谷昌志「女性教師論」(注36)などがある。

森は、女教師三分の一の根拠は何か、そして現実の女教師の実態はどうなっているのか、という問題設定のもとに、以下のことを明らかにしている。①女教師三分の一説は、明治の終わりごろ説かれたもので、女教師の特性から小学校の低学年担当の適任説が出され、一学級一教師制の計算のもとに算出される。②こうしたイデオロギーが今なお主流で、女教師自身の職業意識の希薄さも手伝い、教育活動が停滞がちとなっている。

また、池田は、女教師時代が叫ばれ始めたとき、森の研究をうけて女教師に対する偏見は根拠のあるものだろうか、もし女教師が教育に取り組む姿勢や能力に問題があるとすれば、それはどこに原因があり、どうすれば解決されるであろうか、という問題意識の下に、徳島県下の女教師を対象とした調査を行った。その結果は要約すると次のようになる。①就職の時点で半数のものは、強い教職志向をもっている。しかし、約3割は「デモ・シカ」教師である。②今の仕事への取り組み方は意欲的である。ところが、勤務年数11年から20年にかけて「中だるみ」の傾向がある。③65%の女教師は家庭と職業を両立させているが、そのために睡眠と余暇時間にしわよせがきている。④指導能力に男女差はないと思い、低学年の担任に女教師がむくと考えていない。⑤女教師の管理職への意欲はきわめて低く、女子校長に対する教師仲間の評判は一般的によくはない。

さらに、深谷らは4つの調査研究から女教師のかかえている問題を職業と家庭の両立を中心として深く探っている。それらから以下のことが明らかにされている。まず①卒業後、女教師の2割が脱落し、5割は潜在的な脱落群、そして強固な残存群は3割となっている。そして、脱落への決定的なきめ手は心理的な要因で、いわゆる女らしい教師が脱落しやすく、伝統的な女性規範から逸脱した性格の持ち主に残存者が多い。次に②女子学生の職業と家庭の両立意欲を規定するものは、本人の生育歴である。つまり、女性が高い教育をうけ、職業経験をもちることが娘を両立志向させる要因となる。また、そのような女性は、母親となってもままと遊びやけいこごと、それに化粧などについて伝統的な母

と異なるパターンで娘をしつけている。

また、深谷の「女性教師論」では、男子の卒業生は学生時代忘れものだった人でも、数年もすると立派な中堅教師となるのに対して、女子の卒業生は結婚と育児の問題をくぐりぬけていくうちに、教師としての姿勢に開きが生じはじめる。卒業生を目前にしなが、そうしたことが起きる背景と解決策を提示している。

これらの研究を通して、女教師問題は外的な条件整備もさることながら、女教師自身の主体的な条件や、彼女らをとりまく人的環境にも問題があることが、明確となった。したがって、女教師が義務教育の中心を担いつつある現在、職業と家庭の両立という観点から女教師の職業的社会化過程の体系化が急がなければならない。例えば、深谷らの指摘した5割を占めている「潜在的脱落群」は、どのような予備的社会的を経て、就職後はどのようなキャリア・パターンを示すのか、さらには、彼女らの日常の教育活動はどうなっているのか、などの解明である。

4. 教師集団とモラル

教師のモラル研究は、どうすれば教育効果が高まるのか、という問題意識から出発している。そして、この研究は、教育条件や生徒、教師の能力差などを一定とすれば、教師のモラルが教育効果を左右する大きな要因である、という前提に立っている。そこで、教師のモラルは「教師が自分の学校に満足と誇りを持って結束し、教育目標を達成すべく積極的に努力しようとしている感情ないし態度」と規定されている(注37)。こうして、教師のモラルは所属する集団の組織化と関連するという仮説のもとに、具体的には学校を単位とした教師集団のあり方が注目をあつめる。

このような問題意識から先駆的な役割を果たしたものに「教師集団研究会」の研究がある(注38)。今、その結果を要約すると次のようになる。①外部に対して自主性を持ち、内部に対して民主的にふるまう校長のいる学校の教師の満足度が高い。②モラルを大きく規制するのは集団の組織化の態様に関連する要因である。③したがって、性別、年齢、経験年数などの教師の個人的属性は、モラルを規制する要因とはなっていない。モラルの高い学校は、職員会議に対して不満がなく、研究グループの運営が民主的であり、校長と分会の関係がうまくいっているところと、教育委員会やPTAに対して主体性を持つ校長のいる学校である。

この研究は、モラルを規定する要因は、教師集団の組織化の態様と結論づけているが、組織化の態様を教師の意識を手がかりにして測定しているため、独立変数と従属変数の区別がはっきりしていない。しかしながら、昭和30年代の初期、新しい分野に共同研究で積極的に取り組んだことは評価できよう。今後は、独立変数に学校の規模、地域、教師の属性などを取り、モラルを従属変数として、教師集団の組織化を媒介変数としなが、相互の結びつきを体系的に調べる必要がある。

また、石堂ら(注39)は、教師のモラルは本人の勤務の疲労度と結びつくであろうという仮説から、勤務実態と疲労度の関連を研究している。それによると、1日に6時間の授業を担当する教師に著しい疲労傾向がみられる。そして、小学校においては1、2年および5、6年生の担任の疲労度が高く、専科

の教師が疲労度が低い。さらに、主任層は一般教員と勤務時間に差がないにもかかわらず高い疲労傾向を示す。それから最後に、疲労度とモラルは強く結びついている結論を導き出している。

この研究が、モラル研究に「疲労度」という新しい視点を持ち込み、疲労を科学的に測定したことは高く評価できよう。しかし今の段階は、fact-finding のレベルにとどまっており、さらに学校規模、校務分掌などの学校経営的な条件や個人の属性、職場の雰囲気などの要因をコントロールし、それらの要因が疲労度とどんな結びつきを示し、教師のモラルを規定しているのか、を明らかにしなければならない。

さらに、伊藤（注40）はモラルの規定要因をはっきりさせるために、モラルの高い群と低い群を抽出し、それらと具体的な組織上の諸問題との関連を調べている。そこから、教師のモラルは職場の地位・役割と結びついているが、現象として性と年齢の形で差がはっきりと示されることが明らかにされた。

教育におけるモラル研究は、企業におけるほど単純化できない側面があるので、すぐに明確な結論は下せない。しかし、教師研究において教育効果の問題は避けて通れない。とすると、モラルの概念と説明要因をもう少しクリアーにして、モラルと教育効果の結びつきを明らかにすることが、重要な課題となってくる。

5. 教師行動の研究

教師の行動に着目し、それを説明する適切な理論モデルを作ろうとする研究が出現したのは、きわめて最近のことである。教師行動は多様で複雑なもので、今まで紹介してきた研究領域も最終的にはこの視点から整理されなければならない。しかし現在は、教師行動を体系的に整理したものがないので、その兆しがうかがえる研究を2つに分けて紹介しながら、体系化の糸口を探してみる（注41）。

(1) 「有能な」教師の研究

どのような教師が有能であるかは、人によってさまざまな意見があるであろう。ここでは「有能」を広くとらえて、児童・生徒になんらかの影響を与える指導性と解釈する。そうすると、さきに述べたモラル研究や職場での社会化研究もある意味では、この研究の一端を担っていると考えられる。しかし、ここでは教師のリーダーシップに限定する。

教師の指導性をPM理論の立場から精力的に研究しているものに三隅たちのグループがある。PM概念は集団機能概念でPは課題達成、Mは集団の維持を意味している。佐藤ら（注42）は、リーダーシップのPM機能が、外的基準としての学級意識および学級雰囲気に及ぼす効果について検討し、学級意識、学級集団への誇り、参加雰囲気などと関連があることを示している。なかでも、M機能はP機能より影響力が大きい、PとMが結合したとき影響力はさらに大きくなることが示唆された。また、三隅は福岡市内の83学級の小学校5、6年生を対象とした研究で、PM4類型と学級集団の凝集

性、学校不適応、学習意欲、集団規範の関係を明らかにしている(注43)。それによると、PM型の教師の学級が、それぞれの項目においてもっともプラスの反応を示し、pm型が強いマイナスの反応を示している。すなわち、子どもからみた教師のリーダーシップのあり方が、子どもや学級集団のあり方を強く規定していることが判明した。

こうした教師のリーダーシップ研究は、教育活動を行うとき示唆に富む結果を示している。ところが、方法的に問題がないわけではない。PM理論では、教師行動の測定は児童による評定による。したがって、教師自身と児童の設定にズレが生じる可能性がある。実際、三隅の共同研究者である吉崎(注44)は、教師は自分をP機能に重点をおくのに対して、児童はその教師のM機能に重点をおく傾向があることを見出している。今後は、両者のズレに注目して、教師のリーダーシップの研究を深めることが期待される。

さらに、大坪(注45)は、東京都内の高校2年生約1,800名を対象にして、彼らはどのような指導特性をもった教師が、優秀で尊敬でき、そして好きであるか、という調査を行っている。その結果、次のような指導特性と教師に対する肯定的な評価に相関がみられる。例えば、教師が「明瞭な説明をする」「ユーモアがある」「担当教科に深い知識がある」「生徒の意見に耳をかたむける」とみられると、その教師は優秀であり尊敬され、好かれる傾向にある。

また、深谷(注46)は、教師の属性と子どもの教師評価は結びつきがあろう、という仮説から、教師を新卒、30歳前後の中堅、40歳台のベテランに分け、それぞれ男女各3名の計18学級を選び、東京と近畿の小学生5、6年生を対象にした子どもの描く教師像調査を行っている。今その結果を教師の性差を中心にして紹介すると、「大きな声で授業してくれる」「説明がわかりやすい」「授業中に冗談をいってくれる」などのすべての項目で、男性教師よりも女性教師のほうが高く評価されている。俗に女性教師の長所といわれる指導特性はともかく、「えこひいきをしない」「大きな声で授業してくれる」という短所と思われやすい領域においても、女性教師のほうが高い評価をうけている。

この研究は、子どもの描く教師像の実証的研究が乏しい中で、女性教師をステレオタイプ的に評価しがちな現状を改める先駆的な位置を占めるであろう。

(2) 教師の役割行動の分析

ここでいう役割(role)とは、ある地位に付随する行動の型である。とすると、役割は集団の価値・規範によって規定されるが、それは操作的には役割期待としてとらえられる。したがって、ある地位を占める人の役割行動は、その集団の価値・規範から要請された役割期待を媒介にして、役割を認知し、役割を取得(role-taking)しながら役割遂行する、というプロセスと考えられる。教師行動をこの視点から研究されたものは実に少ない。

少ない中からその研究の2、3を紹介してみよう。続ら(注47)は、教師のものの見方や行動の仕方を行動パターンと呼び、その形成と変化に働く要因を分析しようとしている。具体的には、児童・生徒とその両親が担任教師に対してもつ要望と、教師のこれらの期待や希望についての認知を明らかにしている。そのとき、児童・生徒と父母の教師に対する期待とそれに対する教師の認知のズレが

みられる。そして、この役割認知の差が、教師の役割遂行や地域社会、教師集団への不適応をもたらす可能性のあることを示唆している。しかし、役割認知のズレがどうして生じるかの要因分析は不十分で一般化はされていない。

また、石戸谷（注48）は、この役割認知のズレを役割葛藤（role-conflict）として捉え、教師と保護者の間に役割葛藤が生じている事実を示し、教師が役割緊張を体験するのは、教師のあり方について、両者の間に考えのくいちがいがあるからだ、と指摘する。そして、教師の経験年数が役割葛藤を醸成する基盤と考えている。

教師行動は多様で複雑であるが、これを役割行動の視点から行動モデルをつくるならば、「有能な」教師像や教師のモラル、それに教育効果の解明への糸口になるであろうし、もしそれが可能となれば、どんな教員養成を行えばよいかの指針が提示できるであろう。

結 び

この一世紀の間、教師に関する研究は多く発表されているのに拘らず、実りあるものは乏しい。その主な原因は、教師の仕事をあまりにも大切なものと捉えるあまり、価値的にそして個人的に捉えようとしたことにある。

確かに教師の仕事はその側面をもっている。しかしその反面、教師の仕事はまた共通するものがあり、量的に捉えて他者に伝承できる側面もある。教師研究における重要な視点は、教師の行動はきわめて個人的であるが、それはどこまで量的に捉えることが可能か、ということである。そうしてはじめて、教師行動の量化できない価値的で個人的な側面が浮き彫りにされる。

こうした視点から、教師研究の流れを概括するならば、それは「教師論」から「教師形成論」そして「教師役割論」というプロセスを経てきている（注49）。ところが、現状は教師行動を体系化する段階に至っていない。今後は、教師行動を役割行動という視点から理論モデルを構築し、それを実証的に検証していく作業が必要である。換言すれば、教師の仕事はどんなもので、それは社会によってどのように規定されているのか、そしてその役割期待をどのように遂行すれば、教師の職業的アイデンティティが形成されるのか、が説明できなければならない。それが可能となって、尊い子どもや青年の未来をあずかる教職の科学化のワンステップとなるのである。

（了）

参考文献

(注)

- 1) 東京教育大学経営学研究室「教職・教師に関する文献目録」、1968年。
- 2) 沢田慶輔「教師と生徒の心理」『学級社会の心理』波多野完治他編、昭和28年、金子書房。
- 3) 伊藤敬『「教師の社会学」に関する文献』「教育社会学研究28集」、昭和48年。
- 4) 文部省編「我が国の教育水準」、昭和51年。
- 5) 唐沢富太郎「教師の歴史」、創文社、1955年。
- 6) 石戸谷哲夫「日本教員史研究」、講談社、1958年。
- 7) 潮木守一「戦後教育制度における教師の位置」、大河内一男・清水義弘編「教育改革の課題」、潮出版社、1969年。
- 8) 水井道雄編「教師 この現実」、三一書房、1957年。
- 9) 日本社会学会調査委員会編「日本社会の階層的構造」、有斐閣、1958年。
- 10) 直井優・鈴木達三「職業の社会的評価の分析」現代社会学8、1977年。
- 11) 池田秀男「高学歴社会における教師像」、新堀通也・潮木守一編「高学歴社会の教育」現代教育講座、第一法規、昭和50年。
- 12) 中島太郎編「教員養成の研究」、第一法規、1961年。
- 13) 海後宗臣編「教員養成 戦後日本の教育改革8」、東大出版会、1971年。
- 14) 中内敏夫、川合章編「教員養成の歴史と構造、日本の教師6」、明治図書、1974年。
- 15) 市井三郎他「学芸大学生の意識」、『思想』、岩波書店、1960年。
- 16) 森孝子「日米大学生の教職業選択に及ぼす要因」、『教育学研究』36—3 1969年。
- 17) 池田秀男「教員養成大学におけるプロフェッショナル・ソーシャライゼーションに関する調査研究(I)」『広島大学教育学部紀要』第23巻第1部、1974年。
- 18) 伊藤敬「教育学部生の職業的社会化に関する一考察」、『静岡大学教育学部紀要』昭和54年。
- 19) 今津考次郎「学生の内的側面からみた教師養成過程」『三重大学教育学部紀要』第29巻第4号、1978年。
- 20) 井上健治「教員養成学部生の教職に対する適応の問題」、依田新編『現代青年の人格形成』、金子書房、昭和43年。
- 21) 岩井勇児「教職観の形成に関する研究：I」、『愛知教育大学研究報告』18、1969年。
岩井勇児「愛知教育大学学生の進路意識：I」、『愛知教育大学研究報告』28、1979年。
岩井勇児「愛知教育大学学生の進路意識：II」、『愛知教育大学研究報告』

-
- 29、1980年。
高橋丈司「大学生の社会的態度—教職に関して—」、『愛知教育大学研究報告』22、1973年。
高橋丈司「大学生の学生生活に対する態度—教職志向を中心としての考察—」、『愛知教育大学研究報告』23、1974年。
- 22) 松尾祐作「教員養成大学学生の学生生活への適応と教職意識Ⅰ～Ⅴ」、『福岡教育大学紀要』19、20、22、27号、1971年～1977年。
- 23) 麻生誠他「教師の専門職的地位と役割に関する一考察」、『東京学芸大紀要』24、1973年。
- 24) 前掲、今津考次郎「学生の内的側面からみた教師養成過程」
前掲、伊藤敬「教育学部生の職業的社会化に関する一考察」
- 25) 前掲、伊藤敬「教育学部生の職業的社会化に関する一考察」
前掲、井上健治「教員養成学部生の教職に対する適応の問題」
- 26) 前掲、麻生誠他「教師の専門職的地位と役割に関する考察」
- 27) 河上婦志子「年長教員層の職務意識にみられる学校組織の二重構造的性」、『教育学研究』44巻、1号、昭和52年。
- 28) 田中一生「新任教員の Organizational Socialization に関する研究」、『九州教育学会研究紀要』第1巻、1973年。
田中一生「新任教員の職業的社会化過程」、『九州大学教育学部紀要』第20集、1975年。
- 29) 永井聖二「日本の教員文化—教員の職業的社会化研究(Ⅰ)」、『教育社会学研究』32集、1977年。
石戸谷哲夫他「日本の教員文化に関する実証的研究—教員類型を手掛りとして—」、『筑波大学教育学系論集2集』
- 30) 中内敏夫・川合章編「女教師の生き方」(日本の教師4) 明治図書、昭和49年。
- 31) 木戸若雄「婦人教師の百年」、明治図書、昭和42年。
- 32) 高群逸枝「女教員解放論」
- 33) 森孝子「女教師の需要と養成の問題」、『教育学研究』第27巻第4号、1957年。
- 34) 池田秀男「女教師の職業意識に関する調査研究」、『徳島大学学芸紀要』第19巻、1971年。
- 35) 深谷昌志・和子「女教師問題の研究」黎明書房、1971年。
- 36) 深谷昌志「女性教師論」有斐閣新書、1980年。
- 37) 二関隆美他「教師の職場組織とモラル」、『教育社会学研究15集』1960年。
- 38) 教師集団研究会「教師集団と学校経営」、『教育社会学研究17集』1962年。

-
- 39) 石堂豊他「教師の疲労とモラル」黎明書房、昭和48年.
 - 40) 伊藤敬「教員意識の組織的要因に関する一考察、その1」『静岡大学教育学部研究報告』第25号、1975年.
伊藤敬「教員意識の組織的要因に関する一考察、その2」『静岡大学教育学部研究報告』第29号、1979年.
 - 41) 菊地章夫「教師行動研究の動向(-)」『児童心理』第33巻第1号、昭和54年.
 - 42) 佐藤静一「教師のPM式指導類型に関する研究—学習態度、学級意識、学級雰囲気と及ぼす効果—」『教心18回総会発表論文集』、1976年.
 - 43) 三隅二不二「教師のリーダーシップ(-)」『児童心理』第32巻第1号、昭和53年.
 - 44) 吉崎静夫・三隅二不二「教師のリーダーシップ行動と学級の集団サイズ・担任期間および教師の年齢別との関連」『九州大学教育学部紀要』1977年.
 - 45) 大坪嘉昭「教師の指導活動と高校生の教師評価」『高校生における教師像』、東京教育大教育社会学研究室、昭和52年.
 - 46) 前掲、深谷昌志「女性教師論」
 - 47) 続有恒他「教師における行動のパターン (その三)」『名古屋大学教育学部紀要』1962年.
 - 48) 石戸谷哲夫「教員役割とその葛藤」『教育社会学研究』28集、昭和48年.
 - 49) 伊藤敬『「教師の社会学」の視点と展望』『教育社会学研究』34集、昭和54年.

調査票見本

I まず、一般的な教育についてのご意見をお尋ねします。

1. 生徒たちは、以下のようなことをどのくらい先生に望んでいるとお考えですか。

	とても望んでいる	かなり望んでいる	やや望んでいる	やや望んでいない	あまり望んでいない	ぜんぜん望んでいない
(1) 教え方のうまい先生		2	3	4	5	6
(2) 熱心に授業してくれる先生		2	3	4	5	6
(3) ユーモアのある先生		2	3	4	5	6
(4) 専門についての知識のしっかりとした先生		2	3	4	5	6
(5) クラブの指導に熱心な先生		2	3	4	5	6
(6) 人間としての教養の豊かな先生		2	3	4	5	6
(7) 生徒の個人的な悩みの相談にのってくれる先生		2	3	4	5	6
(8) 教育についてのしっかりとした信念を持っている先生		2	3	4	5	6
(9) ひとりの人間としても尊敬できる先生		2	3	4	5	6

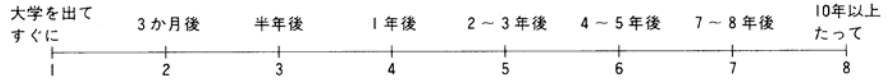
2. それでは、先生方の中に次のような先生は、どれくらいいるとお考えですか。

	10人中10人とも	7～8人	5～6人	3～4人	1～2人	1人もいない
(1) 教え方のうまい先生		2	3	4	5	6
(2) 熱心に授業をしてくれる先生		2	3	4	5	6
(3) ユーモアのある先生		2	3	4	5	6
(4) 専門についての知識のしっかりとした先生		2	3	4	5	6
(5) クラブの指導に熱心な先生		2	3	4	5	6
(6) 人間としての教養の豊かな先生		2	3	4	5	6
(7) 生徒の個人的な悩みの相談にのってくれる先生		2	3	4	5	6
(8) 教育についてのしっかりとした信念を持っている先生		2	3	4	5	6
(9) ひとりの人間としても尊敬できる先生		2	3	4	5	6

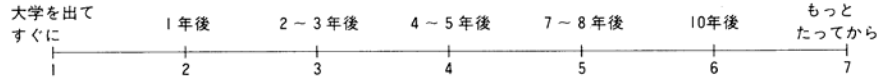
3. あなたご自身は生徒からどのような先生だと思われるとお考えですか。

	とてもそう思われている	かなりそう思われている	ややそう思われている	ややそう思われていない	かなりそう思われていない	まったくそう思われていない
(1) 教え方のうまい先生		2	3	4	5	6
(2) 熱心に授業をしてくれる先生		2	3	4	5	6
(3) ユーモアのある先生		2	3	4	5	6
(4) 専門についての知識のしっかりとした先生		2	3	4	5	6
(5) クラブの指導に熱心な先生		2	3	4	5	6
(6) 人間としての教養の豊かな先生		2	3	4	5	6
(7) 生徒の個人的な悩みの相談にのってくれる先生		2	3	4	5	6
(8) 教育についてのしっかりとした信念を持っている先生		2	3	4	5	6
(9) ひとりの人間としても尊敬できる先生		2	3	4	5	6

4. 個人差があると思いますが、まがりなりにも「教師としてかっこうがつくまで」大学を出てからどれくらいの教職経験が必要だと思いですか。



5. それでは、これも個人差があると思いますが、いろいろの面で「一人前の教師」になるのに大学を出てから何年くらいの教職経験が必要だと思いですか。



6. 先生方をごらんになっていて、教職の現状は1～6のどれに近いとお考えですか。

(○をひとつつけてください)

- 1 賃金をもらう労働者
- 2 聖職者としての性格の強い職業
- 3 専門職としての地位の確立した専門職
- 4 教育技術売りものにする教育技術者
- 5 会社員と同じようなサラリーマン
- 6 専門職を目指してはいるが現状としてはセミ専門職

7. それでは、今後教職がどの方向に進むのが望ましいと思いですか。1～6の中からひとつを選んでお答えください。

- 1 賃金をもらう労働者
- 2 聖職者としての性格の強い職業
- 3 専門職としての地位の確立した専門職
- 4 教育技術売りものにする教育技術者
- 5 会社員と同じようなサラリーマン
- 6 専門職を目指してはいるが現状としてはセミ専門職

8. 理想を別にするなら、近い将来、教職はどの方向へ進む可能性が強いとお考えですか。

- 1 賃金をもらう労働者
- 2 聖職者としての性格の強い職業
- 3 専門職としての地位の確立した専門職
- 4 教育技術売りものにする教育技術者
- 5 会社員と同じようなサラリーマン
- 6 専門職を目指してはいるが現状としてはセミ専門職

9. 教師の生活を以下のように分けた場合、教職が専門職化していくために次のようなことが、どれくらい必要だと思いですか。

	とても必要	かなり必要	ある程度必要	やや必要	あまり必要でない	ぜんぜん必要でない
(1) 教材研究を深める		2	3	4	5	6
(2) 生徒の心理を研究する		2	3	4	5	6
(3) 授業のしかたを研究する		2	3	4	5	6
(4) 一般的な教養を深める		2	3	4	5	6
(5) 教育についての見方を深める		2	3	4	5	6
(6) 学級集団をリードする技術を深める		2	3	4	5	6
(7) 社会についての見方を深める		2	3	4	5	6
(8) 人柄を魅力的にする		2	3	4	5	6

(1)～(8)の中でひとつを選ぶとするなら専門職化するのにどれがもっとも必要ですか。

10. それでは、教職を専門職と考えた場合、(1)～(8)までのことを先生方は平均してどれくらい身につけているとおもいますか。

	すでに十分身につけている	かなり身につけている	やや身につけている	やや不十分	かなり不十分	とても不十分
(1) 教材研究を深める	2	3	4	5	6	
(2) 生徒の心理を研究する	2	3	4	5	6	
(3) 授業のしかたを研究する	2	3	4	5	6	
(4) 一般的な教養を深める	2	3	4	5	6	
(5) 教育についての見方を深める	2	3	4	5	6	
(6) 学級集団をリードする技術を高める	2	3	4	5	6	
(7) 社会についての見方を深める	2	3	4	5	6	
(8) 人柄を魅力的にする	2	3	4	5	6	

11. また、あなた自身は、以下のようなことについてどれくらい自信をお持ちですか。

	とても自信がある	かなり自信がある	やや自信がある	やや自信がない	あまり自信がない	まったく自信がない
(1) 教材研究を深める	2	3	4	5	6	
(2) 生徒の心理を研究する	2	3	4	5	6	
(3) 授業のしかたを研究する	2	3	4	5	6	
(4) 一般的な教養を深める	2	3	4	5	6	
(5) 教育についての見方を深める	2	3	4	5	6	
(6) 学級集団をリードする技術を高める	2	3	4	5	6	
(7) 社会についての見方を深める	2	3	4	5	6	
(8) 人柄を魅力的にする	2	3	4	5	6	

12. 「中学校の先生」という仕事は、社会的にどのような評価を受けているとお感じですか。

	そう評価されていると思う	まあそう思う	なんともいえない	あまりそう評価されていない	まったくそう評価されていない
(1) 社会的に尊敬される仕事だ	2	3	4	5	
(2) のん気で気楽な仕事だ	2	3	4	5	
(3) 経済的に恵まれている仕事だ	2	3	4	5	
(4) 精神的に苦勞の多い仕事だ	2	3	4	5	
(5) やりがいのある仕事だ	2	3	4	5	
(6) 時間的なゆとりのある仕事だ	2	3	4	5	

13. 次に、学校生活のいろいろな面が書いてあります。それぞれの楽しさについて生徒に尋ねたら生徒たちはどう反応すると思いますか。

	(生徒たちは) とても楽しいと思っ ているだろう	かなり楽しい	まあ楽しい	ほんぶん はんぶん	まあ 楽しくない	あまり 楽しく ない	ぜんぜん 楽しく ない
(1) 英語の授業	2	3	4	5	6	7	
(2) 休み時間	2	3	4	5	6	7	
(3) 生徒会や学活	2	3	4	5	6	7	

	(生徒たちは)						
	とても 楽しいと 思っ てい るだ らう	かなり 楽しい	まあ 楽しい	はんぶん はんぶん	まあ 楽しくない	あまり 楽しく ない	ぜんぜん 楽しく ない
(4) 数学の授業		2	3	4	5	6	7
(5) 期末テスト		2	3	4	5	6	7
(6) クラブ活動		2	3	4	5	6	7
(7) 先生との会話		2	3	4	5	6	7
(8) 運動会や文化祭		2	3	4	5	6	7
(9) 遠足や修学旅行		2	3	4	5	6	7
(10) 友だちとの雑談		2	3	4	5	6	7

14. あなたの学校の生徒たちの中で、次のような気持ちを持っている生徒がどれくらいいると思いますか。

	(そう思うことが多い生徒が)					ひとりも いない
	10人中 10人とも	7～8人	5～6人	3～4人	1～2人	
(1) きょうは学校に行きたくない		2	3	4	5	6
(2) 一人で遠くへ行ってしまうたい		2	3	4	5	6
(3) このままおとなになるのが不安		2	3	4	5	6
(4) 自分なんか生まれてこなければよかった		2	3	4	5	6
(5) 小さい頃はしあわせだった		2	3	4	5	6
(6) このままふと死んでしまいたい		2	3	4	5	6

II 次にあなたご自身のことをお尋ねします。

15. 教職につこうと思いいなったのは、あなたがおいくつ位の頃でしょうか。

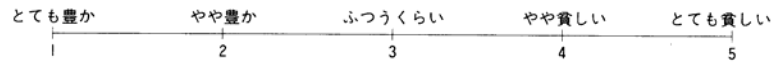
あてはまるものに○をおつけください。

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 小学校低学年の頃から | 5 短大または大学へ入学してから |
| 2 小学校高学年になってから | 6 短大または大学の卒業が近づいてから |
| 3 13才～15才(中学生の頃) | 7 師範学校へ入学してから |
| 4 16才～18才(高校生の頃) | 8 師範学校の卒業が近づいてから |

16. 小学校高学年の頃、あなたはどんなこともでしたか。

(1) 学 業	とても よくできた	かなり よくできた	やや よくできた	ふつう くらい	やや にがて	かなり にがて	とても にがて
(2) リーダーシップ	とても あった	かなり あった	やや あった	ふつう くらい	やや なかった	かなり なかった	まったく なかった
(3) 友だちの数	とても 多かった	かなり 多かった	やや あった	ふつう くらい	やや 少なかった	かなり 少なかった	かなり 少なかった
(4) 先生からの信頼	とても あった	かなり あった	やや あった	ふつう くらい	やや なかった	かなり なかった	まったく なかった

17.あなたのお育ちになった家庭は、当時としては生活程度がどれくらいだったとお思いですか。

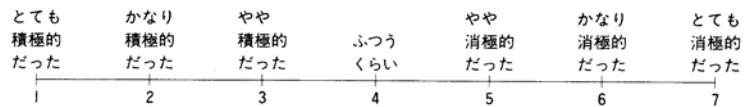


18.あなたが教師を志すのに強い影響力を与えた人がいましたか。

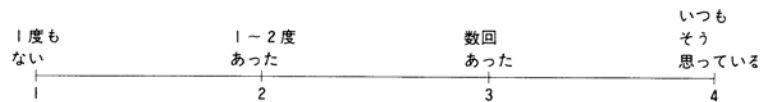
(どちらかに○をつけ、2に答えた方は、「その人は」の方にもお答えください。)

1. いなかった
2. いた
- その人は
- イ. 父、母、おじ、おば()
などの肉親
 - ロ. 小学校の担任()
などの肉親以外の人

19.あなたが教職についてた時のお気持ちをお教えてください。



20.今までに教職をやめたいとお考えになったことがありましたか。



21.小学校高学年の頃、あなたのお父さんはどんな仕事についておられましたか。

- 1 会社員・公務員 2 教員 3 自営業
4 農業・漁業 5 その他()

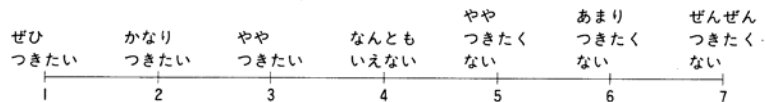
22.それでは、小学校高学年の頃、あなたのお母さんはどんな生活を送っておられましたか。

- 1 専業主婦 2 家業の手伝い 3 農業や漁業の手伝い
4 教員 5 教員以外のつとめ 6 その他()

23.あなたの肉親に教育経験者(つとめた期間を問わず1度でもつとめた者は「あり」とする)はどれくらいおられますか。

- ① 父 1. なし 2. あり
② 母 1. なし 2. あり
③ 兄弟 1. なし 2. あり()人
④ おじ・おば 1. なし 2. あり()人
⑤ いとこ 1. なし 2. あり()人

24.もう1度人生をやり直せるとしたら、教師としての道を志されますか。



25.教師以外の道を選んだとしたら、あなたはどんな仕事についてお思いですか。

26.時間の使い方は、日によって違うと思いますが平日の場合、平均すると以下の時間はどのようになっていますか。

- (1) 起床時刻 () 時 () 分頃
- (2) 通勤時間 () 時間 () 分位かかる
- (3) 学校へ着く時刻 () 時 () 分頃
- (4) 学校を出る時刻 午後 () 時 () 分頃
- (5) 夜テレビを見る時間 () 時間 () 分位
- (6) 帰宅後、教材研究など授業に関連したことに費やす時間 () 時間 () 分位
- (7) 読書など教養に費やす時間 () 時間 () 分位
- (8) 就寝時刻 午後 () 時 () 分頃

III もう少しあなたご自身のことについてお尋ねします。

- 27.性別..... 1. 男 2. 女
- 28.年齢..... 満 () 才
- 29.教職についた年齢..... () 才の時
- 30.教職経験年数..... () 年
- 31.担任教科..... 1. 国語 2. 数学 3. 英語 4. 社会
5. 理科 6. 美術 7. 保健・体育 8. 技術・家庭
9. 音楽 10. その他 ()
- 32.あなたの最終学歴..... 1. 師範学校 2. 短期大学 3. 大学の教育学部
4. 教育学部以外の大学 5. 教員養成所など
6. 大学院 7. その他 ()
- 33.ご家族は..... 1. 未婚
2. 既婚 子ども イ. なし
ロ. あり () 人
いちばん年上のお子さん 満 () 歳

(これで終わりです。
ながいあいだ、どうもありがとうございました。)